

書評編集委員会

1988.10.15
季刊 第85号

書評



岩波新書特集

岩波新書から
戦後を問う

心に残るこの一冊

岩波新書特集 — 岩波新書から戦後を問う —

心に残るこの一冊

書評編集委員会より ④

忘れられた思想家 — 安藤昌益のこと (ハーバート・ノーマン著)

石尾 芳久 ⑥

日本の地方自治 (辻 清明著) 市川 訓敏 ⑧

アリストテレスとアメリカ・インディアン (ルイス・ハンケ(佐々木昭夫著))

市原 靖久 ⑩

ルソー (桑原武夫著) 上田誉志美 ⑫

魔女狩り (森島恒雄著) 小川 悟 ⑭

東京大空襲 (早乙女勝元著) 小山 仁示 ⑯

銃後の責務 芝井 敬司 ⑰

解放思想の人々 (大塚金之助著) 松岡 保 ⑳

資本論の世界 (内田義彦著) 若森 章孝 ㉑

結核をなくすために (松田道雄著) 木田 和雄 ㉒

書評 第85号(10月号)

同時代のこと(吉野源三郎著)三谷 真 27

数学の学び方・教え方(遠山 啓著)山本 登 20

知的生産の技術(梅棹忠夫著)雨宮 俊彦 30

アユの話(宮地伝三郎)佐々木土師二 32

子どもたちの太平洋戦争(山中 恒著)多湖 正紀 34

岩波新書アンケート結果報告 37

連載 日本中国ことばの来往 その30 芝田 稔 43

寄稿 網野善彦氏著『異形の王権』について 石尾 芳久 40

お知らせ 63

編集後記 64

題字・網干 善教(文学部教授)

表紙・ロバート・キヤパ写真集より(文藝春秋刊)

一九三六年には、スペイン、フランスと相次いで、ファシズムに対抗するあらゆる政治勢力を結集した人民戦線内閣が誕生した。パリは、人民戦線を支持する人であふれた。



「人間の記憶のなかの戦争 カロ・ゴヤドミエ」
(みすず書房)
「これがあれを殺したのだ(ウイ、ウイと国民の出
したOKの声が戦死者をつくったのだ)」本文より

「…現在、あらましの認識を少しでも正確な地図につくりあげていくことがよく求められていると思う。そのために必要なことは、そのあらましの認識や粉飾のない希望や意志を、おたがいに突きあわせてみることではないだろうか。もちろん、自分の手持ちカードを絶対的なものであると主張するのではなしに。」(「戦後思想を考える」日高六郎著 岩波新書)

万年危機論のアジテーターには事欠かない現代ではあるが、問題の本質をそれこそテコでも動かぬ意志と内実で、食いがたつては追求する人は稀である。その中で、この日高六郎の「戦後思想を考える」は、殊更派手なアジテーションの警告調ではない。しかし、一見淡淡とした言葉の裏に、特に私達が「戦後」というタームで区切られる40余年に忘却した何かを突きつけている。

「平和と民主主義」。少なくとも、敗戦直後はその言葉が一定のリアリティーを持ち得た、その質や方向性は別問題としても。それは、出版業界においても例外ではなく、それが証しに大抵の文庫本の巻末には「戦前・戦時」の自らへの「自己批判」的決意表明が掲げられている。しかし、現状においてそれらのひとつひとつが骨抜きにされタテマエとなり、「いつか来た道」を急行している。

「出版業界がマスコミの一翼であり、マスコミ自体

が体制内化されていく以上、そんなことは仕方ないじゃないか。」そんな声が聞こえて来そうだ。確かに、ごもつともな答えだ。異論をはさむつもりはない。

「岩波新書が戦後民主主義と平和の象徴的存在って？それは、甘すぎる考えだね。」今回の特集企画をめぐって、幾人もの教員からそういう批判を浴びた。確かに言われればその通りで、過大評価しすぎかも知れない。

しかし、しかしである。勿論、岩波新書の中に多くの駄作が含まれている事も承知した上で、取って言おう。「その岩波すら、今や規定力を失っている現在とは何なのか？」

少しでも世の中が見えている人なら、現状が「民主主義と平和」であるなんて思わないだろう。

実際、「戦後」というタームの中でギマン的な「民主主義と平和」を粉飾する現実になり起ち上がった多くの人々がいた。そんな中で、「岩波」も「怒れる若者」のようにラディカルな問題提起ではなくとも、あるレヴェルの指標とはなり得たのだ、その権威主義性・高踏性を差しひいても。

しかし、現在「世界」の発行部数の激減に見られるように、こと「岩波」関連の書の規定力は失われつつある。だからと、「今こそ岩波が必要だ」などと言うわけでは

なく、「ハト派」にすぎぬと「酷評」されつつも、一定の批判的視座を確立してきた「岩波」ですら、存在自体忘却される現在の危機性を感じずにはいられない。

今回、私達は力量不足を承知で「戦後を問う」という大看板を出した。「戦後総決算」路線に染まろうとする世の中で、しかし何をもって「戦後」に決着をつけるのか。折しも「Xデー」云々がかまびすしいから言うのではないが、たとえば「戦争責任」も含めた日本の歴史的責任・犯罪を捨象して、自己完結的に「水に流す」事を誰が許すのか？ 少なくとも、「戦争」を間に挟んで現在に至るまで、日本帝国主義はアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国で底知れぬ犯罪を続け、何等無反省のままそれを繰り返そうとしている、その国に住む私達は、「無力」という言葉にひざまづくのか？ 否、今出来る私達の試みを始めるしかない。「岩波」ですら読まれない中で、それは容易ではないが。

「敗戦直後には、こうしたつきあわせの作業がいくらか活発だったと思う。いまそれは衰えている。私たちの認識力、行動力をつきあわせて、相互に補強しあっていることが、いま社会的にかなり大切なのではないか。それを怠っていると、私たちは文字通り、ふたたび湖におちこむ恐れがあると思う」（同書。結び）

岩波新書特集

岩波新書から戦後を問う

心に残るこの一冊

石尾 芳久(法学部 教員)	若森 章孝(経済学部教員)
市川 訓敏(法学部 教員)	木田 和雄(商学部 教員)
市原 靖久(法学部 教員)	三谷 真(商学部 教員)
上田 誉志美(文学部 教員)	山本 登(工学部 教員)
小川 悟(文学部 教員)	雨宮 俊彦(社会学部教員)
小山 仁示(文学部 教員)	佐々木土師二(社会学部教員)
芝井 敬司(文学部 教員)	多湖 正紀(社会学部教員)
松岡 保(経済学部教員)	

私達がこの企画を組んだ意図は、『戦後』というものを『岩波新書』を通して、自らの手で批判的に総括しよう』というものであった。勿論、そこには『戦後』の特に出版文化のひとつの画期を成してきた、『岩波新書』(或いは、総体的な『岩波』自体)に対する、ある肯定的な私達の評価があったことは否めない。また、ごく政治的に限定すれば、前首相中曽根(以降)の『戦後総決算』路線、及びそれを許容する時流等へのアンチ・テーゼの構築というが、少なくともそれと対峙し越え得る視座を模索したいという念があった。

しかし、自分達が構想を立て具体的に教員の方々へ「アンケート」「原稿依頼」をする中で、全く見えなかった事に関して、多くの人達から手厳しい批判・苦言を受けた。そのほとんどが、「何故、現在『岩波』なのか」という問いであった。最も基本的かつ、重要な視点の欠如に気付かなかつた私達は、充分な返答を持つ事が出来なかつた。

「『岩波』は良心的かつ進歩的な出版物」。そういった「甘い」視点がなかつたかどうか? どう「甘く」見てもこの評価・視点に立つならば「比較的」「好意的に見て」などの「但し書き」が付いて然るべきであろう。

それは、一般論的な出版文化批判から派生した「岩波

批判」ではなく、識者の間では半ば自明の理とされてきた「岩波アカデミニズムの問題性」への批判が、前提としてあるからだ。

「岩波新書」は「戦後」アカデミニズムの大きな一角を占め、中には「戦後民主主義」の概念を越えた「ラディカル」な問題提起を行った書もあった。しかし、総じて「高踏的」「権威主義的」な出版・編集方針が一貫して「岩波」にある事は、銘記しておくべき事であった。「あった」というのは、実はこの「岩波アカデミニズム」の問題性のある教員から指摘されて、初めて自覚したからである。しかし、これは「うっかりしていた」では済まされない、それこそ「戦後を問う」と大看板を掲げた割に肝心の編集側の内容が、いかに不十分なのかを自ら暴露したものであった。これは、これから私達自身痛切に総括していかなねばならぬ。

また違う視点から言つと、定期的に「岩波新書五〇周年をひとつのメルクマール」として特集等を組むならば、より確固とした（批判的）視点があらねばならない。でないとならば、焦点化しえず漠然とした内容になり、「岩波新書五〇周年おめでとう」のように、「戦後を問う」とどこか話ではない最悪の結果を招いてしまう。それを避ける為にも、（これも某教員の御指摘だが）他の出版文化と

の対象化（たとえば、「中公」「講談社」「三一」など）の作業が必要であろう。そういう作業をふまえる中で、「岩波新書」の（特に、「戦後」の中での）位置・役割が明らかになると今更に痛感する次第である。

と、書き出せば自らの不十分点の羅列に終わりそうで、勿論それはそれとして総括するのだが、最後に「アンケート」あるいは幾人の教員の方々に執筆して頂いた論文の読後感を（ある意味では「做漫」だが）述べてみたい。あえて一般化して言えば「岩波アカデミニズムの幅広さ」を覚えた。それは良くも悪しくも、「岩波」の代名詞であり、「エリート」志向（東大、京大教員中心の選択等）は否めないが、世代を越えて「戦後」否「昭和」を総括する中の、大きな道標であるのは間違いないだろう。

それはさておき、今回の特集を組むに当たり様々な不充分性に自覚する事が出来たのは、ある意味では幸いであつた。それは勿論、多くの教員の方々の厳しくも温かい批判・苦言の故であり、ここに末筆ながら御礼を申し上げると共に、微力ながら学内の教育文化活動を責任をもって担うものとして今後も研鑽につとめたい。

『忘れられた思想家』

——安藤昌益のこと——

ハーバート・ノーマン著

石尾芳久

一九五七年四月四日、カイロのカナダ大使館で悲劇的な死をとげたハーバート・ノーマンの著作である。安藤昌益については、狩野享吉氏渡辺大濤氏の研究以外存在しなかった終戦直後の状況において、東西思想史の比較考察という雄大な視野において安藤昌益に注目したのであって、安藤昌益の本格的研究がここにはじまると、いつてよい。歴史学は発見の学であるというが、そのすぐれた発見の英知がこの著作に結晶している。

本書は、第一章序説、第二章安藤昌益——その人、第三章昌益の時代——徳川封建社会、第四章封建制の批判——社会階級とイデオロギー、第五章文章と方法、第六章理想社会・改革・熱望、第七章影響と比較という七章からなる。

このように安藤昌益が生きた江戸中期、徳川幕藩体制

の専制主義支配が成熟し、人民に対する圧制が苛酷を極めた時代の中で安藤昌益を浮彫にしたことにより、彼の鋭い徹底した批判が何にむけられていたかが明白になり、説得力に富むものになり、今や安藤昌益は国民の思想上の共通財産となつてゐる。

ハーバート・ノーマンは、私の最も尊敬する歴史学者の一人である。岩波書店からは、さらに彼の全集が全四巻にまとめられ、今、私の座右の書となつてゐる。

私は先に歴史学は発見の学であるといつた。そして、ハーバート・ノーマンの著作は、その結晶であるといつた。それでは如何にしてその発見が可能であろうか。それには二つの方法がある。一は、人民史の真実を究明することである。他者の不幸に無関心で自己の恣意を強要する支配階級の歴史、その人間性の真実が人民史の究明に徹することによつて明確となるのである。その二は、歴史における真の意味の発展とは何か、頽廢とは何か、ということを問いつづけることである。そして、そのことも人民史の究明に徹することと深い関係がある。

ノーマンは、第一章序説の中で、「私は数百年の封建時代が日本にはあつたのであるから、そのあいだに専制権力と抑圧にたいする反抗を擁護するような思想があつたことを示す、強い感銘を与える証拠が何かありはしな

ったかという点に近來興味をもつてきた。」とのべている。すなわち専制権力の人民に対する圧制が強ければ強いほど、人民の中からそれに対する正当な政治的抗議行動とその根拠となる思想が生まれる筈であるというのである。ここには、安藤昌益の資質の特色としてノーマンがしばしば指摘した深い人間愛が、実はノーマン自身のものでもあったことを示すものがある。

人間に対する、人民に対する愛と不動の信頼——それはノーマンの歴史学研究の長い苦闘をへて獲得されたものである——をいだが故に語られた彼の歴史学方法論である。そこには民族差別感は全くない。如何なる民族にとつてもこのような事実の発見の可能性がある、とする。

安藤昌益の思想の中で、われわれの胸をうつのは、当時の専制主義支配の本質とそれを補強する儒教イデオロギ―を批判した苛烈極まる見解である。

安藤昌益は、例えば、当時の大奥の制度を批判する。一夫一婦制が人間の夫婦の鉄則であるのに対し、当時の支配階級は、「一夫に多女を附くる」ということをやっているが、これは「其の人の胤を失わず転下国家を他胤に禪るべからず」というのであって、このように「多女に拘わり淫戯に溺る」のは、禽獸と同断である、というの

である。大奥の存在は、それに依存する支配階級の禽獸的性情を象徴する。しかも、これを支持する聖人の道は、転下国家（昌益は「天」の字にかえて「転」を用いる。そこには革命的意味がこめられているとみるべきである）を私するものであって、人民に対する一片の愛情も存しない。安藤昌益は、自己の学問を人民のための学問として位置づけるに至る。

「聖人は不耕にして、衆人の直耕、転業の穀を貪食し、口説を以て直耕転職の転子たる衆人を誑かし、自然の転下を盗み、上に立ちて王と号す。」

直耕する衆人——農民（これこそ「転子」である）に



「ロバート・キャバ写真集」(文藝春秋)
国際義勇軍送別の式典
バルセロナ近郊、スペイン 1938年10月25日

依存し口説をもつて誑かし、農民の転耕した果実を盗んだものが王であるとして、王を断罪する。国家は農民国家であればよく、王をはじめ一切の支配階級は無用であるとするのである。

この口説の徒の中に御用学者が含まれている。

現在の私は、自分が口説の徒に墮落しているのではないかという問題を、常に自分につきつけている。この意味においても、ハーバート・ノーマンの著作は、自分にとって永遠の座右の書である、ということができると。

(いしお よしひさ・法学部教員)

『日本の地方自治』

辻 清明著

市川 訓 敏

日本国憲法並びに地方自治法施行三十周年にあたる一九七六年に刊行された本書は、公害や地域開発の名のもとに進められた地域の荒廃、生活破壊の顕在化に対抗し

て生まれてきた住民運動を、憲法で定めた地方自治の新しい理念と地方生活の実態との間の矛盾の自覚の上に立つものとみなし、そこで問われている地方自治の理念、すなわち「地方自治の本旨」に内在する問題を分析したものである。今日においても、地方自治に関する文献は数限りなく出されているが、日本における地方自治を考える上での基本文献のひとつといえよう。

都市化・工業化による地域の荒廃、地域社会の砂漠化が阻止されずにいることについて、著者は、都市と都市住民の自主性が育成されていないことを問題にしている。

その原因として、第一に、戦前の地方自治観、すなわち農村に淳風美俗があり、都市は悪の温床とみなして、地方自治の意義を農村の伝統的秩序の維持に求め、都市を国家の強力な統制下に置いたこと、第二に盆暮の大量帰郷に象徴されるように、都市に流入した住民自身が、右述の村落秩序との紐帯をもちつづけ、市民的連帯を形成できずにいること、第三に、都市をして絶対権力に対抗する拠点とみなす企業家は乏しく、政府や県庁との間にいかにして抜け駆け的パイプを敷くかのみに腐心する「寄生的産業」が大量に輩出したこと、「都市における食糧の逃げの産業の発展は、すでに指摘した都市住民の村落回帰性と相まって、自立的存在としての都市の成熟を



妨げ、公共社会の成長を阻止する大きい理由」となった、と厳しく批判している（一八頁）。

地方自治の新しい政治原理は、こうした事態に対抗しうる可能性をもつものであり、「憲法の根幹」であると同時に、その試金石であると著者は強調している。しかし、地方自治の新しい理念、「地方自治の本旨」は、そもそも最初から相矛盾した地方自治観、戦前の回顧的自治観と戦後の自立的自治観を内包するものであった、と指摘している。回顧的自治観というのは、山県有朋のもとで、自由民権運動の自治権の拡大要求に対抗して造られた地方自治制を直接の起源とし、地方団体は国家意思を末端にまで浸透させる、あるいは国家目的へ統合してゆくための道具であり、ここでは、「牧民の思想」が支配的であったことが明らかにされている。つまり、地方官は牧民官として人民の教導にあたることを任とするのであり、これは国家

の判断はつねに正しく、地方住民の判断は誤りやすいとする「国家無謬説」をもたらし、「官僚万能論」にゆきつくもの

である。地方団体、とりわけ県庁は国の総合出先機関にほかならず、天皇の代人としての府県知事のもとで町村は階級的な支配をうけていた。町村長や地方議員が自治の担い手となり、名望家支配がうまれていたと評価する見解もあるが、伝統的な「隣保共同の精神」をもって自治と同一視していたのであり、秩序の伝統化により人民の抵抗を抑え込む役割になわされていたのである。

過度の中央集権化をもたらした戦前の自治観に対抗して新しく導入されたのが自立的自治観であり、住民こそが地方自治の主体であるとする自治観である。国のレベルでの民主政治を実現するには、まず地方自治における住民の政治的訓練が必要であると考え、地方自治への住民参加の意義を強調する自治観である。

しかし、新しい理念にもとづいて設置された地方団体は、その固有財源の貧困性から大量の機関委任事務を引き受けている問題にみられるように、有形無形の国の指揮監督を二重三重にうけているのが現状である。三割自治とか一割自治といわれる所以であり、またそれが正しい自治の在り方とみなす戦前の自治観が背景にある。新しい理念を実現する上で、政策決定過程への住民参加の意義が重視される理由がある。住民参加の方式については、本書に国内外の様々な実例が紹介されているが、革

新自治体にみられる首長と住民との直結が議會輕視を生みだし、国と地方の双方で、行政権が立法部に優越している伝統が持続させられている問題にも言及している点に興味深い（一六二頁）。革新首長が誕生している某県の職員が、行政は何ひとつ変わっていませんよ、髮の毛一本変わっただけ、と私にいった言葉が思い起こされた。

（いちかわくにとし・法学部教員）

『アリストテレスと』

アメリカ・インディアン』

ルイス・ハンケ著（佐々木昭夫訳）

市原靖久

バルトロメ・デ・ラス・カサス——自国の植民地政策によるインディアスの破壊を鋭く告発したこの十六世紀のスペイン人ドミニコ会士の名を知ったのは、大学生のときに読んだ岩波新書を通してであった。

『アリストテレスとアメリカ・インディアン』は、ラス・カサスが一五五〇年に論敵と交わした論戦を主要な

テーマとしている。

一五五〇年四月、スペイン国王カルロス一世は、神学者と顧問官からなる特別の會議が征服を実施する正しい方法を決定するまでインディアスにおけるあらゆる征服は停止されるべしという命令を發し、そのための會議をバリャドリに召集した。會議は八月中旬に開會され、ラス・カサスは報告者の一人として、もう一人の報告者ファン・ヒネス・デ・セブルベダと激しい論戦を行なう。

当代一の人文主義者、アリストテレス学者と謳われたセブルベダの主張は、インディオのキリスト教改宗に先行して征服戦争を行なうことは完全に正当であり、教化に不可欠の前段階をなすというものだが、『アリストテレスとアメリカ・インディアン』が注目するのは、その表題が示すように、征服を正当化するために彼がアリストテレスの「先天的奴隸人」説を援用していることである。セブルベダはいう。インディオは生来粗野で劣等であり、アリストテレスのいう「先天的奴隸人」に属する。かかる劣等の民は「その本性からして、また彼ら自身の利益のために、優れた文明と高い徳を持つ君主や国家の支配下に置かれる必要がある。そのようにして彼らは知恵と支配者の法律を無理にも教え込まれ、よりよき道徳、価値ある風習、文明化された生活様式を身につけるよう

になれるのだ」。

ラス・カサスは、一五四二年に彼が国王に提出した報告書（一五五二年の『インディアスにおける破壊についての簡潔な報告』（『岩波文庫に邦訳がある』）のもとになるもの）でも述べていたように、インディオの改宗は平和的な方法で行なわれるべきであり、改宗に先立つ征服戦争は自然法、神法、人定法に反すると主張する。そして、インディオを「生来的奴隸人」とすることに對しては、自らのインディアスにおける経験に基づく膨大な実例をあげて反駁し、インディオは理性を備えた人間であると論証する。ラス・カサスは「生来的奴隸人」説自体を完全には否定しなかったが、現実にはそのような人間など世界にはありえないことを示したのだった。

『アリストテレスとアメリカ・インディアン』の副題は「近代世界における人種偏見の研究」である。著者は、一六世紀のスペインで行なわれた論争、とりわけ、そこでセプルベダによって主張された「先天的奴隸人」説のインディオへの適用を、「一人種全体に劣等者、生れながらの奴隸人と烙印を押そうとする、近代世界における最初の試み」であるとしてらえている。著者は、以後の時代にも同じ試みが繰り返されてきたことを忘れてはいないのであつて、北米インディオに對して、アフリカ黒人

に對して、大洋州の先住民に對して、植民者たちが彼らを劣等者とみなし侮蔑してきたことを例証している。そして、「合衆国における人種差別撤廃の動きに對する抵抗や、南アフリカのアバルトヘイトの理論と實際などが証明するように、今日でもある白人は、一人種全体に永久に劣等民族の烙印を押したいと願っている」と指摘し、スペインにおける一五五〇年の闘争が決して今日の自分たちと無縁のものではないと強調するのである。

『アリストテレスとアメリカ・インディアン』は、十六世紀スペインの知識階級の動向をインディアス問題を通して垣間見せてもくれた。征服戦争の是非が正当戦争



「朝日旅の百科 海外編」より
ティカル遺跡
“仮面の神殿”の名で知られる階段状
ピラミッド（本文より）

論の問題として神学的・法学的に論じられていること、それゆえビトリアラサラマンカ学派の学者たちもこの問題を論じていたことなどを本書によって知り得たのは有益であった。しかし、単に過去にのみ視線を向ける読み方を著者はきつと許さないだろう。上で述べたように、著者の視線は、現在に至までの人種差別にはつきりと向けられているからである。

読者は現在を見つめることを求められる。世界で、日本で、現在なお人種差別・民族差別が行なわれていて。本書は、それをしっかりと見つめながら読まれるべきなのである。そして、そのときはじめて、著者の次のことばが理解できるのである。「四世紀以上も前にバリヤドリで論じられた、文化・宗教・風習・技術的知識の異なる二つの民族の間の正しい関係は何かという問題は、極めて今日的で重要な意味を持つ。セプルベダとラス・カサスは、われわれとは異なる民族がこの世界には存在するという事実そのものが発する問いへの、二つの基本的で相対立する解答を、今日もなお代表し続けているのだ。」

(いちらは やすひさ・法学部教員)

『ルソー』

桑原武夫著

上田 譽志美

京都府下の学園の一角で、「六十年安保」を過ごし、続く「学力テスト反対闘争」、「自衛隊パンフ闘争」(註1)後の虚脱感の中で、私は『ルソー』をはじめて手にした。まわりには後に「関大八十周年学友会」を担う雄弁会の仲間がいた。私は同著者の『文学入門』を高校時代に一読していた。そのプラグマティズムの理論と方法を導入した手法にひかれながらも、「ロシアマルクス主義は、……ルソー思想をそれとして受けいれることはなかった。」(一八〇頁)といわれるように当初、私は「ルソー」に興味を覚えなかった。それでも、「ルソー」の挫折と孤独の生涯に共鳴し、「党派闘争」に飽きたりず、「単独者」キエルケゴールに傾倒していく過程で、私をして『同書』は「ルソー」へと導いた。

ところで、桑原武夫氏は『文学入門』、『新唐詩選続編』

や『一日一言』の著作において、また、梅棹忠夫著『モ
ンゴール族探検記』や西堀栄三郎著『南極越冬記』等「岩
波新書」に対して多大の影響を与えた。そして殊に、戦
後知識人の活動過程に果たした氏の役割とその後の変化
は、戦後知識人運動に大きな教訓を残した。『世界』を
言論の場とする知識人グループ、とりわけ京都で末川博
氏らとともにあつた著者への思い入れをこめて『ルソー』
を手にするとき、かつては「平和問題懇話会」のメンバ
ーであり、一九五〇年代の単独講話・再軍備に反対して
闘いながら、八十年代に入ると新日本主義の確立のため
に梅原猛、梅棹忠夫、上山春平氏らとともに奔走しはじ



画文集『安野光雅の「フェアブル紀行」』
(日本放送出版協会)より

める姿には予期せぬ顔をみる思いがする。

六〇年「安保」改定反対闘争後、党員知識人・文化人
のおおぐが、日本共産党から離脱していくきっかけにな
った武井昭夫氏らによる『さしあたってこれだけは』の
声明が出された翌年、一九六二年暮れ、『ルソー』は出
版された。なお、『同書』は「まえがき」にも「河野健二、
樋口謹一、多田道太郎の三氏とともに構想を考えた。」^(注2)
とあるように全編桑原氏のペンになるものではない。当
時すでに、桑原氏の主張には「新しい日本学の確立」を
掲げる国際日本文化研究センターの思想にたつらなってい
く布石がある。後年集約された『明治維新と近代化』
(小学館創造選書、一九八四年)には、氏の担った役割
が端的にあらわれている。桑原氏はこの中で明治維新が
政治革命ではなく、「文化」革命であつたとし、日本の
歴史的発展は江戸時代に高い水準の文化があり、近代化
をなしとげる基盤ができていたとし、その原動力を社会
の階級矛盾や対立によるのではなく、日本文化の適応能
力、伝統的特性に帰される。ここからは、天皇が文化的
伝統の体現者であるとする思潮といくばくの隔たりもな
い。当時の私はそれらを見通す能力を持ち合わせてはい
なかった。むしろ、大学に入って(一九六三年)、「高校
紛争」の体験を忘却の彼方に追いやり、「丑松」を決め

こむ私には、「ルソーの政治、経済思想は……、先進国においてはすでに超越された、……とする考えがむしろ支配的であるように見える。それは恐らく尊大なまちがいである。」(一八八頁)といった論調が快く響きさえた。同じ頃、かつて、私らを指導し、離党した知識人・文化人は、一部を除いてマルクス主義からも大衆運動からも遊離し、貢献しえなくなっていく傾向を示した。それは、即時的な目前の民主主義的要求の実現というところから出発した戦後知識人運動の帰結であった。

とまれ、私にとって、「ルソー」は部落解放運動に立ち還らしめる一つの機会を与えてくれた一冊であった。

註1 『正常の中の異常―現代高等学校論―』 鞠川了諦、三省堂

新書、一九六八年、一五〇頁以下参照

註2 河野健二「京都芸大現学長とは、偶然にも河合秀和学習院

大教授らと共に、私は一現場の教師として「教科書検定」

問題の頃(一九八三年)「政治経済」の執筆にかかわり文

部省と直接対峙する機会を得た。 一九八八・九・一

(うえた よしみ・文学部教員)

『魔女狩り』

森島恒雄著

小川 悟

岩波新書の中で、特に心に残るこの一冊について書くようにとの依頼を受けましたが、どれが特に心に残るこの一冊になるのかと、はたと困惑した次第です。一九七〇年に、衝撃的な書物が岩波新書の形式で出版されました。丁度六九年から七〇年にかけては、いわゆる全共闘の時代であり、大学紛争の時代であるともいわれていました。特に日本全国の諸大学にとっては、混迷の時代でもありました。実に数えきれないくらいの多くの書物が巷間に溢れ、さまざまな形での討論の交わされた時代でもありました。多くの若者たちは、情熱的に革命や社会の改革について、はたまた学問について語っていました。そんな雰囲気の中で出版されたのが、森島恒雄氏の「魔女狩り」であります。

ドイツやその他西欧のフォルクスメルヘンの中では、

多くの魔女が登場します。私たち日本人が想像する魔女は、だいたいが一定の姿をしています。しかし、あの姿は、どうみても異形であるといえましょう。箒に乗って空中を飛ぶなんざ、常人のわざではない。まさに、異形異質のものとして魔女は描かれ、そういう心象を人々に与えています。しかも、魔女は悪を行うものというふう

に説かれているわけです。

森島氏の「魔女狩り」は、まことに象徴的な書物で、ここでは中世のローマ・カトリック教会の強権的な人民支配と、己が権威の保持のために、聞くに耐えない、あるいは見るに耐えない所業が書かれています。異端審問は、いわば反教会の思想の持主を暴いて審問に付し、ついには死を与えることに他ならない。魔女と断定された女性に対する審問の教科書、たとえば「魔女の槌」では、魔女がいかに悪魔と性交するか、彼女はいかに人間を性的無能や不妊症にするか、男の性器を奪うにはどうするか、またどうして空を飛ぶことができるのか、などが記述されているそうです。本来世界教会としてのカトリック教会は、人間を永遠の「神の国」に導き入れるためのさびしい教育の場であったと、森島氏は書かれています。そして、当然そのための機構が構築され、学問も政治も何もかもが、この機構の中に組み込まれ、



「ヨーロッパ中世の四季」木島俊介
(中央公論社)
(ベトラルカの「勝利」より)貞節の勝利
15世紀末頃制作

教会の支配下におかれることになります。理想が矛盾を生み、「魔女」幻想を人民に植え付けることになります。荒唐無稽が真実となります。一方では聖職者の権威によって腐敗と墮落が始まります。抵抗者は、すべて「魔女」になってしまふわけです。かの宗教改革者であったヤン・フスですら火刑に処せられるのです。フスは、火刑の寸前にも転向を拒否しました。最後は、内臓にいたるまで取り出されて焼かれてしまいました。

今日も、多くの「魔女」がいるそうです。いや、いるそうですというより、本当にいるのです。政治権力という「世界教会」は、今日も存在して私たちを支配してい

ます。昔は、ヨーロッパでは、ローマ・カトリック教会という明確な形を持っていました。今日は、政治権力といたり、政治機構といたり、あまり具体性のない名辞で呼んでいます。私たちは、空を飛ぶことができませんし、悪魔の恋人もいません。ただ、「魔女」になる可能性はもち合わせているといつてもよいでしょう。「魔女の槌」に代る現代の教科書や法律も、この可能性の芽を摘むべく効果を發揮しようとしています。

これは、森島氏の「魔女狩り」に関する印象批評から出発した、私のささやかな感想文です。とにかく、いろんなことを考えさせてくれる面白い本でありました。

(おがわ さとる・文学部教員)

『東京大空襲』

早乙女勝元著

小山 仁 示

一九四五年三月一〇日未明の東京大空襲について、著者早乙女勝元は、次のように書いている。

たった一夜の空襲で、いや、正確にいえば、二時間二三分の空襲で、東京はもつとも凄惨苛烈な戦場と変わり、下町はその大部分を焼失し、勤労庶民の町は、音を立てて灰燼の中にくずれ落ちてしまった。単に家だけが焼けたのではない。その小さな家の中で、昨日まで、笑い、しゃべり、ピチピチと生きて生活していた人たちの八万人が、まっくら焦げやロウ人形のような死体になってしまったのである。

当時、国民学校高等科一年生だった早乙女少年は、「一発が、すぐ横にいた女の左肩をかすって、電柱につきささり、もう一発が、一歩前で空をふりあおいだ男ののど首につきささっている。雨アラレという表現があるが、



まったくその通りの驚異的な密度だった。たまたま焼夷弾の落下する隙間の、ごくわずかのところに、私がいいたのにすぎない。一歩前へ出ても、横へ出ても助からなかった」という体験をした。この文字どおりの雨あられの焼夷弾投下に加うるに、この夜の東京は北風が吹き荒れていた。警視庁資料によると、死者八万八七九三人、負傷者四万〇九一八人、被災者一〇〇万八〇〇五人、焼失家屋二六万七七一戸。しかし、実際の死者は一〇万人を超すといわれている。

これはまちがいがなく、世界史上、都市における最大の火災であり、広島・長崎への原子爆弾投下を別にすると、世界の空襲史上、一度にこれだけの犠牲を出した例は他にない。

二時間二三分の戦闘で、一〇〇万人が家を失い、一〇万人が死んだ。太平洋戦争末期のアメリカ軍による本土空襲とは、これほどまでも苛烈なものであった。たとえば、この前年一九四四年六月一五日、大機動部隊の支援下、アメリカ軍七万一千人の

上陸部隊がサイパン島に殺到した。激闘約二〇日、日本軍守備隊四万三千人は全滅した。女性や子どもも巻き添えにされ、日本人非戦闘員約一万人が命を失った。チャモロ人を主とする島民四千人のうち、死者は六百人を超した。それでも、二〇日間で、死者約五万四千人というのが日本側の犠牲者であった。これに対して、二時間半足らずで非戦闘員の一般市民十万人が死んだのが、三月一〇日の東京大空襲なのである。

早乙女勝元を中心とする東京空襲を記録する会の運動が、全国の戦災都市に広がりはじめたのは、ベトナム戦争まっただ中の一九七一年であった。それはアメリカ軍の爆撃下でたたかうベトナム人民との連帯であり、ベトナム戦争反対の運動であった。このような動きが、大阪空襲の体験者である私の心をゆさぶったのは当然である。私は大阪で育ち、大阪に住み、大阪をこよなく愛している。そして、私は大阪空襲の体験者であり、近代史家である。大阪空襲の実態を明らかにすることが私の責務だと思つたとしても、うぬぼれが過ぎるとのそしりはあたらぬ。いや、思いあがり、うぬぼれといわれてもこの仕事だけはやりたかった。

空襲体験者たちの運動に加わり、百人を超す人びとの話をきき、戦災地跡に何度も足を運び、日本側の公式資

料や新聞にあたり、アメリカ軍側の記録を調べ、ついに私もまた『大阪大空襲―大阪が壊滅した日』（東方出版、一九八五年）を公刊した。早乙女勝元は作家の目で、東京大空襲をとらえた。私は歴史家、とくに近現代史家の手法で大阪大空襲をとらえた。こうして四〇年来の課題を果たし得た。

ついでに記しておく、岩波新書の庄司光・宮本憲一『恐るべき公害』（一九六四年）が、本年私が著わした『西淀川公害―大気汚染の被害と歴史』（東方出版）を触発した書物であることも事実だ。

ただ、岩波新書のなかの近代史・現代史関係のものの中に、読むにたえない、まちがいだらけのものもあることを述べておく。私としては、岩波新書という一種の權威によりかかるのは、ほんとうにいやなのである。小さな出版社の、真に良心的な書物に目を向けるのが、関大生協の書評編集委員会の仕事ではなかるうか。

（こやま ひとし・文学部教員）

「銃後の責務」

芝井敬司

はなから些細なことにこだわるのはみつともないが、お赦し願いたい。「書評編集委員会からのお願い」には「岩波新書発行四〇周年にあたり」とある。アレっと思つて書架から引っぱり出してみたら、やっぱりそうだ。今年二月に出版された新書別冊の表題は、『岩波新書の五〇年』だ。この本は、岩波新書を語る時に大いに役立つが、これを頼りに調べてみると、どうやら編集委の方は、戦後の再出版を起点に数えたようだ。一方『五〇年』の方は、昭和一三年を起点にしている。

もちろん問題は数え方ではない。ただ私には、学生時代に古本屋の軒先で覚えた戦慄が忘れられない。軒先で手にした戦前刊行の旧赤版の最後の頁には、岩波茂雄の刊行の辞が印刷されていた。靖国神社の秋の大祭の日にものされたこの文章は、「天地の義を輔相して人類に平

和を与へ王道楽土を建設することは東洋精神の神髄にして、東亜民族の指導者を以て任ずる日本に課せられたる世界的義務である。日支事變の目標も亦茲にあらねばならぬ」という一文で始まる。

詳しくは『五〇年』に譲つて、あと一箇所。「皇軍が今日威武を四海に輝かすことかくの如くなるを見るにつけても、武力日本と相並んで文化日本を世界に躍進さしむべく努力せねばならぬことを痛感する。これ文化に關与する者の銃後の責務であり、戦線に身を曝す将兵の志に報ゆる所以でもある。吾人市井の一町人に過ぎずと雖も、文化建設の一兵卒として涓滴の誠を致して君恩の万一に報いんことを念願とする。」

あわてて付け加えておかねば、不公平だろうか。一方で彼は、「批判的精神と良心的行動に乏しく、やゝともすれば世に阿り権勢に媚びる風なまきか。偏狭なる思想を以て進歩的なる忠誠の士を排し、国策の線に沿はざるとなして言論の統制に民意の暢達を妨ぐる嫌ひなまきか。これ実に我国文化の昂揚に微力を尽くさんとする吾人の窃に憂ふる所である」と述べているではないか。国士的を用語・文体は、その時代を映してはいるが、彼の真意はそこにはない。あるいはそれは、一種のカムフラージュかエクスキューズにすぎないと。

しかし、こうした読み込みや真意捜しは、やはり好意的に過ぎると言わざるをえまい。「吾人は非常時に於ける挙国一致国民総動員の現状に少からぬ不安を抱く者」であり、「武力日本と相並んで文化日本を世界に躍進せしむべく努力」することこそ、「文化に關する者の銃後の責務」であると心得ている。まさしく岩波新書は、銃後の責務として、靖国神社に起願の上、昭和一三年に誕生したのだ。

戦後の再出発に際して、岩波茂雄の刊行の辞は、どのように受け取られ、克服されたのか。ここで私達は、あまりの樂觀主義に出会って驚くことになる。



「ロバート・キャパ写真集」(文藝春秋)

「日々につのつてゆく言論抑圧のもとにあつて、偏狹にして神秘的な国粹思想の圧制に抵抗し、偽りなき現実認識、広い世界的観点、冷静なる科学的精神を大衆の間に普及し、その自主的態度の形成に資することこそ、この叢書の使命であつた」（「岩波新書の再出版に際して」一九四九年）。そしてこの評価は、「岩波新書について」（一九七〇年）、「岩波新書新版の発足に際して」（一九七七年）と受け継がれて今にいたつてゐる。結局、戦後の岩波新書は、戦前の「刊行の辞」を十分に批判し克服することなしに再出版した。

さて、前述の「お願い」には、岩波新書は「戦後」の比較的『良心的』な部分を担い、表現・発行してきた数少ない出版物です」という文がある。この書評編集委の評価を頭から否定するつもりはない。実際、私自身が「この一冊」といわれても、とても絞り切れないほど多くの作品に感動し刺激されてきた。けれどこの評価も、良かれ悪しかれ時代とともに歩んできた一商業出版の軌跡であつて、決して今後の歩みを約束するものではない。「戦後の責務」が杞憂であれば幸いである。

（しばい けいじ・文学部教員）

『解放思想史の人々』 大塚金之助著

松岡保

「戦後」という問題と係わつた岩波新書となると、重く心に浮んでくるのが、本書である。副題が「国際ファシズムのもとでの追想一九三五―四〇年」で、その執筆時期からいえば、戦後ではなくむしろ戦中を考えるに相応しい新書かとも思いつつそうである。

内容も、現在では岩波新書とはまずならない形のもので、著者が一九三五年―四〇年の間に、総合雑誌や学生新聞、さらには書店の業務用小冊子に書いた（社会）思想史上の人々についての短い「追想」を、集めたものである。それ故、「トマス・モア」「アインシュタイン教授の一面」「ジェームズ・ワットとアダム・スミス」「ドイツ経済学界とフリードリッヒ・リスト」「トマス・ペイン生誕二百年」といったところから始まる合計一六の短評、追想は、長短の差も大きく各々独立したものであ



写真集「私たちの昭和史」(大月書店)
米軍ファントムジェット機の九州大学墜落に抗議、板付基地の撤去を要求して家族ぐるみのデモ行進 1968年6月2日(本文より)

る。それでいて、これが、一九四九年から出された書版新書の第一号であり、戦後の岩波新書の再出発の第一号でもあった。

私をこれを最初に読んだのは、一九五〇年代の前半、大学生の時ではないかと思うのであるが、読んでみても衝撃を受けたのは、実のところ、中身以前に「まえがき」であった。河上肇や滝川幸辰等、大学関係者の受難については多少知ってはいたが、大塚金之助氏がそれにも勝る目に会われた先生であるとは、不敏にして、初めて知った。

一九三三年に治安維持法違反で検挙され、東京高商を

追われたこと等もさることながら、警察の監視のために、「一九四〇〜四一年に、数百冊の洋書と一千冊の邦書と数十種の内外雑誌の連続号とを焼きすてまたは破りすてたばかりでなく、社会思想に関する書きぬきや原稿までも焼きすてなければならなかった」との文章は、いつ読んでも、その悔しさを私は共にする。そうした経験はない世代ではあるが、書物を焼却することを余儀無くされたということ、その思いだけで今も胸を打って仕様がなないのは、思想の抑圧、弾圧というものが、文字どおりの焚書を伴ったことを初めて知った衝撃であったようである。東京商大の図書館に三年間、入館が許されなかったということと並んで、そうした事実を初めて教えられた。

そうした中で、匿名で、五十年記念とか百年記念とかにかこつけ、「人類解放の長い・苦難な歴史に何かのつながりをもつ人々を追想」することによって、人類の解放、すなわち「ひろく、人種的・民族的・政治的・警察的・宗教的・性的・社会的・階級的な圧迫、迫害、無知、偏見および迷信からの解放」への意図と期待を、かすかに託して書かれたのが本書を構成する短評、追想なのである。そして、一見、繋がりのない個々の文章を繋ぐものこそ、その思いであり、それはやはり随所に感じとられるのであって、その限り、本書の出版が許される

ようになったのは、やはり戦後となってであつたのも頷ける。そして本書によつて、私はロシアの「ゲルツェン」や「チュルヌイシェウスキー」の名前に初めて接したのではかろうか。

こうした意味では、私にとつては、戦後は戦中とやはり繋がりが、その裏面であるようである。戦後もそれ自体で四十年を越え、一世代半に及ぼうとしているとはいへ、戦中を抜きにした戦後、戦中を忘れた戦後が、どうしても考えられないのは、たんに年令と幼少の体験だけでなく、本書のような例に接したためであるようにも思えるのである。

ただ、それにつけても、大塚氏の「人類解放」への期待が、戦後、依然として果たされていないことも事実である。戦後すぐの「民主主義にたいして、いま、きたたりにあぐらをかいている強い人間は「戦後民主主義は虚妄だった」という。それはまちがっている。当初問題だったのは、社会生活のなかの民主主義だった。その問題の解決をしないでいる現在の民主主義こそ虚妄なのだ」（松田道雄『町医者（の戦後）』との思いは、一九七七年に亡くなられた大塚氏の本書を読み直すときにも、やはり伝わってくるように思われる。清水幾太郎『ジャーナリズム』を同時に伴つて出発したのが戦後の岩波新書であ

り、そこにも戦後が表現されていることを承認しながら、私は大塚氏や松田氏の方を取りたいし、固守したい。

（まつおか たもつ・経済学部教員）

『資本論の世界』

内田義彦著

若森章孝

岩波新書の中には、この他にも内田の仕事として、『社会認識の歩み』や『読書と社会科学』があり、いわゆる内田山脈を構成している。内田の本の特徴は、社会のさまざまな現場で、ルーチン・ワークではなく、何か新しいことを自分の責任でやらねばならなくなつたときに、勇気をあたえてくれることである。だから彼の本は、たんに経済学者だけでなく、あるいは政治学や社会学を専攻する人をこえて、作家、写真家、デザイナーなどの創造を仕事としている人びとに読まれるのであろう。

創造や仕事には、ルーチン・ワークでなければ、かな



らず賭^かが含まれている。一〇〇%の成功が保障されていないからこそ、個人は知識と情報を収集し、それを科学的に分析し、仕事の目的を設定しなければならぬ。仕事の現場では、個人はつねに賭をする存在である。賭をする存在が構成する社会だからこそ、諸個人はいちかばちか冒険してみるのではなく、社会科学とそれにもとづく目的設定を必要とするのである。このような社会を特徴づける言葉が、「市民社会」、「分業」、「参加」である。これとは反対の性格をもった社会を特徴づける言葉が、「コネ」や「地縁・血縁」である。例えば、就職や昇進の際に、「能力」で決まるのが前者であり、「コネ」で決まるのが後者である。

資本主義経済の特色として、一般に、生産手段の私有と労働力の商品化、商品生産の一般化、利潤目的の生産が指摘されるが、同じ資本主義社会といっても、その「社会」は、西ヨーロッパと東アジアの日本とは大きく性格を異にするのである。内田は日本の近代化の「成功」を自画自賛する「明治百年」

の雰囲気の中で、また、「高度成長」に人間と自然が巻き込まれていく中で——この頃には、モレーツ社員がもてはやされた——、マルクスを使って、西ヨーロッパの資本主義とは何であるか、を描いて見せた。西ヨーロッパの資本主義は、人間が伝統的共同体(村や大家族)や自然に埋没していた「旧」社会とは対立的な・コネのない「社会」を、人間と自然の開發^{アウスイットウツク}擷取を通じてつくりだした。したがって、この資本主義「社会」は、生産手段の私的所有を廃棄するならば、諸個人の連帯、参加、自己管理を特徴とする社会^{ソシヤリズム}主義に通じうるのである。日本の資本主義は、果してこのような性質の資本主義であろうか。日本の場合、生産手段の私有をたとえ廃棄しえたとしても、そこにでてくるのは、会社主義や国家主義ではないだろうか。

彼の「資本論の世界」は、明治以来の日本の近代化や、その総決算ともいふべき戦後の「高度成長」を考え直すうえで、おおくの示唆をあたえてくれる。その一つは、高度経済成長を通じて、日本資本主義は「社会」を發展させたのではなく、諸個人を「会社」に埋没させ、人間の生きる権利を軽視し、自然を大規模に破壊するという「反経済」を生み出した、ということである。諸個人の「発展」の抑圧と「反経済」が、超スピードの高度成長を生

組織部員募集!!



組織部員を募集しています

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会・映画の開催
など、文化・教育活動を自らの手で作り上げてみま
せんか。

●連絡先 生協本館3F・組織部内

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線 4821)

みだした大きな要因ではないだろうか。

現在は、一九八〇年代の後半であるが、日本の戦後の歩みを再検討するうえで、内田の仕事は、一九六〇年の安保闘争が日本の保守陣営の戦略を変更させたことを明らかにした日高六郎の仕事（『一九六〇年五月一九日』、『戦後思想を考える』）とともに、忘れてはならないものである。

内田の仕事を二二世紀に向けて引き継いでいく場合、以上のような点に加えて、「世界社会」という視点が必要であるように思われる。若い学生諸君の日常感覚には、西欧対日本、伝統と近代、人間と自然という視覚と並ん

で、これらを包みこむような「世界社会」的な意識が生まれつつあるのではないだろうか。彼の仕事は、諸個人の、国境をこえた普遍的関連の形成を考える場合にも、想像力を刺激してくれるはずである。

（わかもり ふみたか・経済学部教員）

『結核をなくすために』

松田道雄著

木田和雄

わが国では、今や、結核は罹患率、死亡率ともに激減し、もはや過去のように忌わしい不治の病ではなくなっている。手許の総務庁統計局編『国際統計要覧一九八七』によると、わが国の結核罹患率は一九八二年に人口一〇万人にたいして五六・二、結核による死亡率は一九八六年に同じく人口一〇万にたいして三・四である。この結核死亡率は、死因の第一順位を占める悪性新生物による死亡率一五八・四の僅か四七分の一に過ぎない。その点、一九六〇年頃でも、結核死亡が毎年一〇万人当り約五〇人、戦前の一九一〇〜一九二〇年前後には二〇〇〜二五〇人に達していたことを思えば、まさに隔世の感がある。私がとくに結核に関心を抱くようになったのは、他ならぬ私自身が、一九四七年から五二年までの五年間、結核症により長く苦しい闘病生活をよぎなくされたからで

ある。この間、一九四九年には腹膜結核と診断され、一時目の前が真暗になった。一九四九年といえば、岩波新書の戦後再出発の年である。それまでの腹膜結核は、「転帰死亡」のケースが圧倒的に多かったのである。しかし、私の場合、「禍福はあざなえる縄のごとし」で、腹膜結核に罹ったために、幸いにも国立神戸療養所で治療を受けられるようになった。というのは、ちょうどその頃、メイド・イン・USAのストレプトマイシンが厚生省を通じて臨床研究用に国公立病院・療養所に配給され、「被験者」としての適用患者を探していたところであり、腹膜結核患者はそれに該当していたからである。私はストレプトマイシンに生への希望をつなぎ、「被験者」として最大限の協力を惜しまなかった。「被験者」は、いわば高級モルモットであったのである。療養所には約五ヶ月間入っていたが、そこで当時の結核患者の惨めな状況をつぶさに知った。

一九四九年頃の療養所では単に「大気、安静、栄養」の自然療法だけではなく、すでに胸部外科手術も盛んに行われていたが、その手術に耐えられない重症患者が多かった。脊髄カリエスでギプスに入ったままのものはまだしも、腸結核で下痢が止らず衰弱死するもの、ある日突然大咯血を起して窒息死するもの、脳膜結核によって

急死するもの等等が跡を絶たなかった。神戸療養所の北庭の一隅に霊安室があり、その窓から明りの洩れていない日は少なく、それを見るたびに暗澹たる気持に陥ったものである。それでも、療養所に入所できた患者はまだ恵まれたほうで、療養所に入ることだけに一縷の望を托しながら、結局待ち切れずに死んでいった多数の人人がいたのである。日本全国で結核の実態調査が行われた一九五三年には、治療を要する患者が二九二万人で、全人口の三・四パーセントに上っており、それにたいして療養所のベッド総数が一〇万床くらいあったのか、定かに憶えていないけれども、ごく限られたものであったことは確かである。

私は、療養所でのストレプトマイシン治療の効果を検証する「試験的開腹」を終えた後退所し、在宅療養を行うようになったので、気分の良いときには書見器でさまざまな本を読み始めた。そんなときに出会ったのが、岩波新書の戦後続刊にいち早く登場した松田道雄さんの『結核をなくすために』であった。この本を読んでもっとも感銘を受けたのは、日本では結核医学の水準は高く、結核は十分に治せる病であるので、いま真に必要としているのは結核の病理学ではなく、「結核の政治学」であると、松田さんが喝破しておられた点である。私は、こ



「ロバート・キャパ写真集」(文藝春秋)
最後のドイツ兵を掃討中のフランス軍兵士
とレジスタンスの闘士たち 1944年 8月25日

の点を高く評価しつつ、私なりに考えてみた。確かに「結核の政治学」は不可欠であるが、それを実現可能にするのは、日本経済を極度の貧しさから脱却させる経済学ではなからうか、と。そのときいらい、私は経済学をもっと勉強してみたいと思うようになった。

それからずっと後になって、私が桑原武夫先生のお仕事を少し手伝ったさい、偶然松田さんと一緒になり、京都の夷川小川東入ルの松田医院へお訪ねしたことがある。私にとってひじょうに印象的であったのは、先生の診察室にはソビエトの大百科事典をはじめ社会科学書が書架にぎっしりと並んでいたことである。

岩波新書発行より今年で半世紀、戦後の続刊開始からでも三九年、この間に日本経済は大きく成長するとともに、結核死亡率は著しく減り、平均寿命も世界一、二位まで伸びたが、はたしてGNP大国にふさわしい社会福祉が国民一人一人に保障されているだろうか。社会福祉の面では近年むしろ後退が目立っている。松田流にいえば、今こそ「社会福祉のための政治学」が必要であろう。

(まだ かずお・商学部教員)

『同時代のこと』

吉野源三郎著

三 谷 真

ベ平連に参加している同級生がいた。どういう活動をやってたのか詳しくは知らないが、集会に出たり、デモに加わっていたらしい。私服の刑事に写真を撮られたと言っていることもあった。また、彼らも参加していたかどうかは知らないが、ベ平連のグループがある高校

の文化祭に乱入し、騒ぎを起こしたというのを、たまたまその高校へ通っていた兄から聞いたことがある。私の兄は文化祭とヴェトナム戦争とどんな関係があるんやと、かなり憤慨していたが、翌日そのことを友人に問い正すと、ひと言「もつと勉強せえ」と言われたのをよく憶えている。一九六九年、中学三年の時である。

彼らがどんな動機やきっかけでベ平連に参加するようになったかは、結局聞けずじまいであったが、彼らがよく手にしていたのが岡村昭彦「南ヴェトナム戦争従軍記（正・続）」やその類のものであったことを思い浮かべれば、今ならそのへんの事情はだいたい想像がつく。しかし、当時の私にはほとんどわからなかった。というより、関心がなかったであろう。生徒会活動をやったり、その後には生徒会批判のピラを学校の近所の電柱に張ったり、けっこう「政治的少年」であった（つもりの）私ではあるが、ヴェトナム戦争についてはなぜか関心がなかった。いや、ヴェトナム戦争だけではなく、自分のミクロコスモスを除いて、社会のでき事に無関心だったのだらう。もちろん、私は私なりに時代の空気というものを感じてはいたのであるが、それを確かめ、考え、自分のものにしようとはしなかった。それが彼らと私の決定的な違いであったように思う。



「戦争がはじまる 福島菊次郎全仕事集」
(社会評論社)

文字通り戦後生まれで、戦後しか知らない私にとつて、戦後とはテレビであり、東京オリピックであり、東大安田講堂であり、トイレットペーパー騒ぎ等々であるわけだが、今ならそれらについて語ることができる。しかし、その当時はどうであったか。進みつつある事態のなかでその事態を見つめること、このことは確かに非常にむづかしい。だが、これほど大切なことはない。その大切さを教えてくれたのが、吉野源三郎の『同時代のこと』である。(残念ながらも手元には残っていないし、絶版で手に入らないのではあるが、副題は「ヴェトナム戦争を考える」であったように思う。)この中で氏は、太

平洋戦争中に、私はその戦争が一体何であったのかと知らなかった。もし、知っていたらもつと別の行動ができたであろう。今ならあの戦争の意味はわかる。しかし、今わかつてもうどうにもならない。なぜあの時わからなかったのか。あるいは、わからうとしなかったのかを自戒と悔恨の情をこめて語っている。戦後十数年経て、復興と平和を達成した日本。しかし、現実には安保条約のもとでヴェトナム侵略に手を貸していた日本。この現実から目をそむけようとしている我々「戦争を知らない子供たち」への痛烈な警告の書であった。

現在に目をこらすためには、常に過去をふり返らねばならない。戦後四十数年は短いようで長い。その中で、四日市公害や水俣病など忘れさられようとしている(正確には、忘れさせられようとしている)現実がある。時代を見つめるとは過去からの連続のなかで学ぶことである。情報化社会と言われる今日、知ることは易くできるように見える。しかし、情報は常に操作されうるということを忘れてはなるまい。「大本営による発表」の可能性は大いにありうる。現実から目をそらす時代を見つめ続けるといふことは難しい。しかし、吉野氏の悔恨をくり返してはならない。

『数学の学び方・教え方』

遠山 啓著

山 本 登

岩波新書戦後四十年ということであるが、岩波新書には、いろいろ思い出のつきないものがある。しかし、ここでは数学教育に関心をもつものの立場から、遠山氏の「数学の学び方・教え方」を取り上げることにした。なお、すでに亡なられた方の著書を批評することははばかれるが、歴史的文献として取り上げることにはしたい。

問題は、数学史のなかで、または数学教育において、「現代数学」をどう位置づけるかということである。いわゆる「現代数学」は、一九世紀の半ばに、物理学とも深い関連をもっていたが一方で矛盾を露呈していたそれまでの「近代数学」を批判するものとして出現した。

数学は、最も初歩の「 $1+1=2$ 」でさえ高度の抽象であり、また数学の存在価値はこの抽象性にあるといつてよい。しかし、抽象はその背後に具体的な事物があつ

てはじめて意味をもつのであって、単なる抽象のための抽象は無意味な空論にすぎない。具体的であった「近代数学」を批判して生まれた「現代数学」は、ややもすれば抽象のための抽象におちいる傾向をもっている。

「現代数学」は歴史的必然性をもつて生まれたのであるが、それを数学教育にとり入れるかどうかは別の問題であった。しかし、戦後、欧米を中心として、数学教育に「現代数学」を取り入れようとする「数学教育の現代化」運動がまき起った。遠山氏が主宰していた数学教育協議会も、この運動をすすめる立場に立っていた。わが国でも、七一年の指導要領改訂を機にこれがとり入れられ、「集合」、「一対一対応」などのことは、小学校の算数にまで出してくるようになった。その結果、子どもたちは、こういった抽象的な数学について行けず、数多くの「おちこぼれ」を生み出すことになった。

「数学教育の近代化」は、日本だけでなく、欧米各国においてもあいついで失敗し、現代化運動は現在では下火になつてしまっている。こ



のような結果をまねいたのは、本来具体的であるべき数学教育の場に、抽象的な「現代数学」を無理に持ちこんだからであると、筆者は考えている。

遠山氏は、「数学の学び方・考え方」において、一対応や集合を重視するなど、「数学教育の現代化」運動と同じ立場をとっておられる。ここでは、とくに「第四章、空間と図形」にみられる、ユークリッド幾何についての氏の主張について論じてみたい。

遠山氏も書いておられるように、ユークリッド幾何はヨーロッパ近代以降数学教育の基本的教科書として用いられてきた。したがって、それをどう位置づけるかは、数学教育の基本的視点の問題である。現代化運動は、ユークリッド幾何を数学教育から排除する立場をとっており、遠山氏も同様の立場から「論証の練習をするにはもつとも不適當」だとまでいわれる。しかし、筆者は、ユークリッド幾何の数学教育、あるいは論証教育における意義を高く評価する。その理由は、図形の諸性質は、最も簡単な計算「 $1+1=2$ 」よりも具体的であり、人類は具体的な図形をあれこれ吟味することを通じて抽象的な理論を作り上げてきたのであって、こうした人類の理論形成の過程を迫体験させることは数学教育としても、論証教育としても重要であり、それによって、子どもた

ちに具体と抽象の関係について学ばせることができる、と考えるからである。

筆者が批判したいのは、遠山氏に代表される「現代数学」を一方的に重視する考え方である。抽象を極度にまで重要視する「現代数学」も、数学史の流れからみれば一時的な傾向にすぎず、それもいまや変化しつつある。数学教育にこのような一時的風潮を軽がるしく取り入れることは決して好ましいことではない。このようにみえると、「数学教育の現代化」が失敗したのも当然であったと筆者には思えるのである。

(やまもと のぼる・工学部教員)

『知的生産の技術』

梅棹忠夫著

雨宮俊彦

本書は、岩波新書に何冊もあるロングセラーの、一つである。すでに百万部以上出たそうだ。初版は、一九六



「戦争がはじまる 福島菊次郎全仕事集」
(社会評論社)

1951年にできた平和公園の慰霊碑前では腹を空かせた原爆孤児たちが「ハングリー、ハングリー」と参拝者たちに銭をせびる風景が見られた。(本文より)

九年、万博の前年である。著者は、一九七四年にできた民族学博物館の創設者である。

内容は、発見の手帳、ノートからカードへ、カードとそのつかいかた、きりぬきと規格化、整理と事務、読書、ペンからタイプライターへ、手紙、日記と記録、原稿、文章、といった章だてになっている。知的活動をすすめていく上で必要なこまごました問題について、いろいろな工夫の紹介とともに述べたものである。

この本の成立の背景には、著者の、野外科学者としての経験、日本語表記運動（ローマ字運動、カナモジ運動など）への関わり、京大人文学研究所における共同研

究などがある。わかりやすく、すぎのない文章とあいまって、大きな説得力を發揮した。この本のおかげで、京大式カードがずいぶん売れたそうだ。七三年に大学に入った評者も、さっそく数束買い込んで、あれこれメモったことを覚えていた。（それっきりだったけれど。）

知的生産の技術という言葉は、原書とか文化人といった言葉がまだ完全には死語になっていなかった当時には、斬新ですこし刺激的なひびきがあった。

今日では、情報産業の発展もあって、本書を元祖とする類書は本屋にあふれているし、システム手帳やファイルの整理法など、ビジネスマンの必須科目のひとつとなっている。また、本書の後に登場したコピー機やワープロ、パソコンなどの電子情報機器の発展と普及はめざましい。隔世の感がある。（国語教育だけは、あいもかわらず、文学鑑賞に偏った状態のままだが。）

しかし、本書は今日でも、十分読むに耐えるし、依然として刺激的だ。こまごました記述を通じ、重要な原理的問題が的確におさえられているからである。

例えば、ローマ字論やカナモジ論など、古めかしく見える。しかし、送りがなの不統一やあて字など、日本語の表記の問題は相変わらず片づいていない。むしろ、あて字や意味のはっきりしない漢語を多用した公文書の復

活など、ワープロの出現によって、後戻りした部分もある。(最近の文章で、著者はこれをワープロ反動と言ひ、メーカーにしるユーザーにしる真の国語愛にもとづいた自制のないことを嘆いている。)

著者の言う技術は、昨今あふれている新製品紹介とは類を異にする。いかに使うか、運営するかについて、規格化の必要性や記録の意義、精神の層流の説、など、原理の吟味と遵守を通じて、精神のスタイルにまで到達している。より、公的な場では、これは民族学博物館といつた情報の管理・生産の技術にまで発展するだろう。

率直に言ふと、評者は、知的生産という言葉があまり好きではない。本當に新しい発見や考えならともかく、にたよつたりの小説や評論、論文などを沢山書きまくつたり、前衛芸術みたいな脱構築的新奇さに頼るのは、下品な気がする。だから、本書の著者の完璧主義と遅筆はいい話だと思ふし、バベルの図書館の創設者ボルヘスの神のごとき博識と羞恥を思つたりもする。

結局、現在の知のフロンティアは、あれこれの前衛運動ではなく、科学と人類の在庫目録の作成の場にあるのだろう。本書の著者は、方法あるいは技術へのこだわりを通じて、確実に現在の知のフロンティアに参画している。方法と技術の確立に忙しかつたのか、文明の生歴史

観や文学などのアイデアは肉付けさせられないままだが、アイデアの方向自体は文明の生と死や大脳のコードを言うヨーロッパの碩学のものより、はるかに科学的で健全だ。人間と文明に関する科学の肉付けと発展は、次の世代の仕事である。

ともあれ、科学と方法の吟味に裏付けられた仕事は、エンターテインメントとしても、面白い。千里の新名所民族学博物館へは、一度は行つてみるべきだ。

(あめみや としひこ・社会学部教員)

『アユの話』

宮地伝三郎著

佐々木 土師二

国道九号線を福知山で離れて一七六号線へ入り、鬼退治の伝説で知られる大江山のトンネルをくぐり抜けた地域は、京都府最北部の奥丹後の入口である。そこから日本海に突き出ている丹後半島の先端を目指して道を辿る



と、その地名が読めないために記憶する人も多い。「間人(たいぎ)」のマチを中心に、海と山の間に細く散在する集落から成る「丹後町」に着く。この町の北部を流れる小さな川が「宇川」である。そこは一九五二年からの約五年間に京都大学動物学教室が、アユの産卵調査や社会生態学的観察にもとづいて、その生息可能密度の分析や放流基準を検討したフィールドとして、宮地伝三郎著「アユの話」(一九六〇年刊)に登場する川である。

「アユの話」は、この川の当時の模様を「宇川はたいしてみばえのしない小さな川だし、それに町からは遠く離れたほんとうのいなかにあるから、村外からの釣り人はあまりこない」(二八一頁)とか「宇川のように、京都府の最北端にあつて、いちばん近い宮津市までもバスで四時間たらずもかかるような所では、アユがいくら多くても、遊漁者はほとんどなく、村の人達のアユとり

も、けつきよくお祭りに終わるだけで現金収入にはほとんど「ならない」(二〇五頁)と述べている。そして、アユ解禁の「川開き」の風景を

「この日はいわば村のお祭り、小・中学校も午前中は休みになるし、農家のおかみさん達も、赤ん坊を背中に負いながら、岸に立って、水中で網をまく亭主殿をげきれいする。午前八時のラッパの鳴る前の河原は、飼犬まで総出で大さわぎである。ラッパの合図とともに、水音とかん声があたりをおおい、川のはほとんど全面で網がかかる。子供達は石の下へ入ったアユを手づかみにしたり、岸近くへ逃げてきたアユを、竹ざおで水面の上からたたき殺したりするありさまである。そうしておよそ一時間後には勝負がついてしまふ」(一六三頁)と描写し、アユとりが現金収入にならない点を「解禁の翌日以後は、宿屋のおじさんがお客の夕食の皿のためにとどき川へ入ると、野良仕事のとどきや昼寝の時間に、川好きの衆が三〇分ほど網をまく程度でおしまいになる」(一六四頁)と書いている。

ここに引用した部分は、ボクの記憶にある「宇川」をよく描いている。ボクは中学生までこの川に隣接する集落で過ごした。一九五一年に京都市内の高校へ入るために村を離れたが、六〇年に修士課程を終えて就職するまで、毎年数回は帰省していた。そして最近の一〇年ほどは、高齢で歩行困難になった母親を自分の車に乗せて、年一回お盆の時期に、最初に書いたルートを通って郷里

へ帰っている。学生時代にはバスと汽車を乗り着いで八時間はかかったが、今では車ならその半分の時間で行ける。昨今は道路が整備されている。丹後半島に入ると狭く曲りくねったところも多いが、数年前までは細い山道で難渋した一七六号線などは山間部ほど広く走りやすくなっている。このため『アユの話』でいわば僻地の川として描かれた「宇川」も、宮津から一時間、福知山から一時間半、そして京阪神から四時間になっている。

都会が近くなったことは、この農林漁業の村に功罪いずれの影響も与えている。子供の進学・就職の選択幅が広くなったが、青年人口の減少は目を覆いたくなるほどである。観光客は増えたが、都市型公害が広まり自然環境の破壊が進んだ。農林漁業の技術は進歩したが、そのための借入金が増えた。都会なみの情報環境に置かれているが、地域文化の維持は困難になっている。

しかし基本的な問題は、戦後の国の政策が職業としての農林漁業への自信と誇りを失わせていることではなからうか。この夏、ボクの子供仲間の漁師が語っていた。漁獲高を上げるために手釣りから機械釣りに変え、次に電子機器を導入し、今やコンピュータ装備が必要だと言われているが、海には魚を見なくなった、と腕のいい漁師だったが、土建の日雇作業に出ている。

「宇川」も細く薄くなり、アユもめっきり減った。

(ささき としじ・社会学部教員)

『子どもたちの太平洋戦争』

山中 恒著

多湖 正紀

母と姉が泣きながら芋堀りから帰ってきました。帰途、あの「玉音放送」を聞いたからでした。八月十五日、兄弟たちは疎開していましたが、自分は陽炎だから家にいた時のことでした。国民学校の二年生の頃で、その当時のことについて、山中氏ほどの鮮明な記憶はありませんが、その時は、期待外れの残念さと、もう空襲などに怯えなくてもいいのだといった一種の解放感を感じました。それに先立つ一年間では、学校で「教育勅語」なるものが幾度も読み聞かされ、それを最敬礼をして聞かなくてはならないので水鼻汁が出てきて困ったことや、奉安殿なるものがあって前を通る度にこれまた最敬礼をしなけ



(写真集)「子どもたちの昭和史」(大月書店)

ればならなかったのを憶えています。

最近、新聞の投書欄に軍備や保核賛成などの若い世代の人たちの意見が載ったりします。また仕事柄「教育勅語」について話をして、その内容について無知だったり、何故いけないのかが分からない人たちが案外たくさんいます。おまけに、妙に国粹主義的な心情から、新憲法は米国が押しつけたものだ、戦後の教育は米国の干渉があったから駄目だ、などと簡単に言うのを聞いて驚きます。一方国家権力は文部省をつうじて、勤務評定、教育委員民選廃止、教科書検定などと教育に干渉の度を強め、さらに公費助成を餌に思うままに教育の主導権を掌

握せんものやつきになっています。一体、私たちは歴史から何も学べない国民なのでしょうか。その意味で、この山中氏の著書は大きな反省を促すものです。

山中恒氏は(最近、旧陸軍の細菌兵器開発に関する資料を発見しニュースとなった一九八八・八・三一付朝日新聞朝刊)私の好きな児童物語作家ですが、この著書は、かれが九年間を費やし、一九八一年に完結した六巻にも及ぶ「ボクラ少年国民」(辺境社刊、勁草書房発売)と同系統のもので、本人によりますと「私のもっとも書きたかった部分——戦時下の子ども風景を編年体形式で総括することをもくろんだ」ものだといふものです。そこに取り上げられている子どもの風景は実に種々多岐にわたるものです。まだ子どもたちが大人の社会での出来ごとにさほど影響されずに学校で学び「広っぱ」で遊びに打ち興じられた時期より、戦争が徐々にかれらの学校生活、日常生活に影を落とし、やがてその全てを覆い包んでしまう様子が克明に再現されています。昭和十二年に始められた日中戦争とその膠着化、そして果して繰り上げられた数々の策略。膨大な軍事予算の増加に加えて、国民に全面的な協力を強いる国民騒動員法の制定。それから「教育勅語」を梃子にして子どもたちの洗脳が始まります。軍部の情報操作により、戦争の「かつこよ

さ」が煽りたてられ、また厚かましくも、侵入に抗する人たちを天皇の御稜威を傷つける賊軍であると信じ込ませてしまいます。昭和十六年から小学校が国民学校にかわります。これは「高度国防国家の総力戦士として鑿国の精神を強度に發揚する皇民の錬成を期する」機関として小学校が当てられたということでした。かくて学校のみならず家庭における子どもたちの一挙手一投足が、一旦緩急あらば義勇公に奉じて天皇のために死ぬことのできる国民造りに方向づけられました。こうなれば人間性も個性もあつたものではありません。戦局の悪化が国民を窮乏の底に陥れますが、軍部は狂つたように第二の戦争に突入します。

それから敗戦までの年月は、子どもたちにとっては、大人の、特に軍部の狂気に振り回された歴史といえますが、今、私たちはそれを反省の材料とするどころか、自分たちの教育、生活を破壊した者たちと一緒になつて一種の懐かしさにひたり、さらには戦後の教育を非難するのはどうしたわけでしょう。山中氏は戦時中の子どものための教育がどんなものであつたかを、今一度はつきり思い出すことを勧めています。

(たこ・せいき・社会学部非常勤講師)

岩波新書アンケート〈'88夏実施 対象：教員〉

- ① これまでお読みになった「岩波新書」のなかで、最も戦後について考えさせる一冊をあげて下さい。(よろしければ作者も)
- ② その一冊の内容をすこし書いて下さい。
- ③ その本を通してあなたは戦後をどう考えるようになられましたか。(感想的でも結構です)
- ④ その一冊を手にとられた、あるいは手にされようとした契機または意思を書いて下さい。
- ⑤ 戦後をあなたが考え語り問うとき、『岩波新書』はどのような存在と思われますか。

次に続くものは関西大学教員に「戦後」について岩波新書を通じてふり返っていただいたアンケート（八八年夏実施）結果です。編集委員会からのアンケート趣旨が不十分であったこともあり、アンケートの回収はおもわしくありませんでしたが、この「アンケート」を行うことにより、得たものも大きかったと思います。編集委員会としては当初、先生方に紹介していただき、アンケートに答えていただいた結果をもって「戦後」をいろいろな見方とらえ、より有効に活用させていたかどうかと考えておりました。今回のアンケートを何らかの形で「書評」誌に反映し、それをもって先生方の御協力への感謝の意に換えたいと思います。

回収したアンケートの内容は多岐に渡っていますが、主に分類されるのは以下の通りです。特にアジアと日本との関係についての書物、学問における「戦後」、またあの原子爆弾が投下された「ヒロシマ」の書物、思想を追った書物です。

「戦後」、私たち日本人は「侵略」の歴史を公教育ではあえて知らされていません。しかし、「戦後」がそうであるがゆえに、また「侵略」をやめるために、「戦争」とその後の歴史を真の姿をさぐりつつ、日本人個人の歴史と重ねる必要があるのではないのでしょうか。

① 武田楠雄 『維新と科学』

② 明治維新へ至るまでの近代的科学技術とそれにかかわる觀念を知識人たちがいかに苦心して導入したか。

③ 「戦後」の経済的發展と今日の豊かさもまた、欧米の先進的科学技術の導入にかわる苦難を無視しては語れないだろう。「戦後」というと、とかく、政治や外交の問題のみが声高に議論されがちだが、社会変革にいかん技術革新が大きくかかわっているかに、若い人々は関心をもつてほしい。

④ 日本の近代化の問題を考える手がかりとして、また、著書武田楠雄が書いた中国科学史（特に明代の算学）についてのすばらしい論文を知っていたので。

⑤ 左翼的進歩立場に固執して足をすくわれつつあるようだ。青年学生をリードしつつある特りが振り返ってみたら、誰一人ついてきていなかったということにならぬよう柔軟で広い視野をもつてほしい。

（文学部教員）

① とくに〈戦後〉を意識して読んだものは一冊もありませんが、とりあえず『日本人と近代科学』（渡辺正雄著）をあげておきます。

② 近代科学の問題は、すでに個別日本人の問題で、す

まなくなっているが、作者の説く「近代科学と人間文化、社会との関係を正しく理解する総合的視野の必要性」は、こんにちますます濃くなっていると思われまます。

③ 問題意識が同じ。

（文学部教員）

① 鶴見良行 『バナナと日本人』

② かつては高級な果物だったバナナ。日本人とフィリピンの戦前・戦後の関係を通して、バナナに秘められた悲しい歴史を語っている。

③ フィリピンの人々の犠牲によつてバナナは安く手に入るようになったのだが、そういう事実が見えにくいのが「戦後」であり、われわれはその不透明な部分を知らねばならないと思う。

④ フィリピンを訪ねて、人々の生活が予想以上に貧しいのに驚き、アジアへの関心が強まった。

⑤ 他にも新書がたくさん出ているので、昔はいざ知らず、今では one of them になってしまった。特に「戦後」と「岩波新書」を結びつけることは難しいように思う。

最後のページで宣言している岩波のポリシー通りが
んばってほしい。

(文学部教員)

① 記憶をたどってみて思い出した一冊は、神田三亀男
編の『原爆に夫を奪われて——広島農夫たちの証
言』でした。

② 広島市から10キロ離れた農村の男性が建物疎開に動
員され被爆。夫を亡くした農夫の証言を聞き書き風
にまとめたもの。

③ 戦争の犠牲が現存していること。だからこそ反戦・
反核・平和の闘いの姿勢と行動が大切だということ。

④ 被差別部落の古老から聞き取りをして部落の民衆史
をまとめているので、その参考にしたと思ったから。
⑤ 新書判の出版物の中では、岩波新書は時事的な問題
をまともな上げ、批判的に提示してくれる点が良い
と思います。

(社会学部教員)

① 後藤昌次郎『免罪』昭和54(1979年)黄81

② 弘前大学教授夫人殺人事件など典型的な免罪事件の
経過を詳述しながら、戦後日本の法と裁判のゆがみ、

警察捜査の戦前との連続性を明らかにしている。

③ 日本国憲法に保証された基本的人権、戦後民主主義
といっても、日本社会自体は、戦前からの人的・組
織的連続性を、あるいは場合によっては、制度的思
想的連続性を強く持っている事に気づかされた。で
あるとすれば、一体「戦後」は何だったのか。

④ もっぱら自らの興味、関心から。

⑤ 「戦後」の比較的「良心的」な部分を担い、表現・
発行してきた数少ない出版物です」という書評編集
委員会の認識は、少々樂觀的で過大評価なのは。

岩波新書について評価できるのは、商業主義と教養
主義の比較的「良心的な」結びつきを代表してい
る点だと思う。

① 蠟山芳郎『インド・パキスタン現代史』

② インド、パキスタン独立の平易な紹介。

③ 連合国の考え方を受容し、アジアをできるだけ忘れ
ようとした戦後に対して、アジアの考え方を対決さ
せる重要性を痛感。

④ バングラデシュ独立の支援のため、インド、パキス
タン独立史を、その背景として知る必要があったため。

⑤ 真理と常識の対立、補完の関係から見て、「新書」は

「健全な常識」にしっかりと根を下して、真理への理解を試みた。

① 日高六郎編 『1960年5月19日』

② 1960年5月19日は新安保条約強行採決の日であるが、この書はその日が日本の大衆運動の歴史のなかで象徴的な日であるとする立場にたつて、運動を記録したものである。

③ 1960年に、私は高校2年生であったが、もちろんその当時その日の意義を考えたことはなかった。今にして思えば、あの日から日本の「戦後」は大きく変わったのだ。

④ 学生の頃、先輩に教えられて、読書会に使ったから。私の戦後認識は「岩波新書」の影響が大きかったと思う。「岩波新書」は私にとって重要なマス・メディアであったし、今もある程度そうである。

⑤ J・V・ネウストプニー 『外国人とのコミュニケーション』

⑥ 国際化時代の外国人との意志疎通に関する根本的問題を考えている。

⑦ 物理的な外部空間の国際化に、島国としての日本の

精神構造かつ追いつくため、どれ程の時間がかかるかを考えざるを得なかった。

① 戦後の日本における外国諸教育が必ずしもうまくいっていないことの原因を考えるために。

② 岩波新書は、その都度考えなければならぬ問題の具体的提示だけでなく将来への考え方の方向も示してくれる。

①

②

③

④

⑤ ご趣旨に添うような本を読んでいません。申訳ありません。

① 鶴見俊輔 『戦後日本の思想』

② 戦後日本の思想の潮流として重要と思われる五つの流れをとり上げて論じたもの。

③ 「戦後」が「戦前」とどう違うのか、あるいは同じなのか、ということを考えるキッカケとなった本で、結論はまだ出していないが「戦前」では困る、ということぐらいは言えそうです。

- ④ 「60年安保」が契機で読んだものです。(が、もちろんその他にも印象に残る本は少なからずあります。『もの言わぬ農民』『小つなぎ事件』(2))
- ⑤ 大変役に立ちました。

特定の書物によって啓発されたという記憶はありません(時々その交友関係等を通じて自然と形成して来た感があります)。従って、本アンケートの各項目に的確にお答えすることは残念ながら不可能です。悪しからず。

- ① 大江健三郎 『ヒロシマ・ノート』
- ② 大江のヒロシマとの接触とそのかわり
- ③ 一部の特権階級のためでなく、民衆⇨庶民の歴史を大切にしなければならぬと、一部の特権階級の犠牲になるようなことは、この前の戦争で終わりたいと思います。
- ④ 大江が好きだから。
- ⑤ 良心の基準を示唆してくれるシリーズだと思っています。

- ① 桑原武夫 『文学入門』



写真集「女たちの昭和史」(大月書店)
商社のも隠しと石油ショックによる物
価高騰に抗議する女性たち
1973年11月 東京(本文より)

- ② それまでの反社会的・非生産的な一種の道楽との支配的な戦中の文学に対する認識を平明に説くことで、文学青年のコンプレックスを解消してくれた。「文学とそれに対するインタレスト」の関係を中心とした戦後を象徴する文学論であったといえる。
- ③ 戦中・戦後派の文学生として、本書は小生には文学通りの文学入門書であり、今日でも名を時代を越えて普遍性をもっており、後進の指導にも必読書の一つとして必ずすいせんする。そして文学も肩身をしぼめなくてよくなった戦後によく思いをはせる。
- ④ 当時京都大学教授の著書の講演を聞き、大いに感動

していたので、本書の出版と同時に購入した。1950年当時の劣悪な用紙が、その頃かえって読書欲をかきたてた思い出がある。

⑤ 天皇絶対視の戦中から終戦と激動の中で、今のよう
にラジオ・テレビのマスメディア社会から考えられ
ない情報知識源に不足していた頃、貧しい学生にも
比較的入手しやすかった「岩波新書」は、あの思潮
の混乱期の青年に客観的な思考の基盤を養う上で大
いに役立った。

① 小田 実 『われわれの哲学』

② われわれの哲学とわれらの哲学とは異なる。われら
の哲学には個性も独立性もない。それはわれらとい
う意識に統合された無性格なる画一思想に過ぎなく、
切迫した「現象」に対処する哲学などではない。切
迫した「現場」で生きる人間は生身の人間であって、
現状に埋没した「場」の人間ではない。「現場」は現
状に立脚しながらも未来を指向し、その実現に立向
う人間の「共性」の場であり、各人の自由と平等、
個性と孤立あつてはじめて成立しうる真の実践的世
界なのである。

③ 戦後はたしかに初期の若者のいう「理論」的なる世

界であつたが高度成長、石油ショック等を経過して
日本経済の順調なる発達に促されて我々はいつの間
にか「場」の世界に安住するようになった。今日の
我々は豊かさで見せかけの平和に安んじたこの「場」
の世界に既に現場的危機と切迫かつせまっているこ
とを自覚して、真に「共生」の場をつくるように努
力しなければならぬ。

① 戦後の現状に少なからざる危機を感じた私は（日本
人の物質面、精神面に）かつての米連の指導者であつ
た小田実（著書）のこの本にふと読んでみようかと
思う興味を覚えた。

⑤ 岩波新書がはたした戦後の良心的な役割を今まで以
上に持続して公使していただきたい。

— 連載 —

日本中国ことばの来往 ゆきぎ

その30

芝田 稔

“南北”ことばのちがい

中国の経済開発特別地区の中でも、広東省深圳地区は香港と直接往来ができるだけに、南北のことばがぶつかりあって、ことばの渦潮現象を起している。深圳地区は地域的には南方方言区域に入っているが、経済特別区だけあって、人的交流の面から見れば、共通語が幅をきかす傾向が強いのである。これを“北のことば”と呼び、交流の最も密接な香港や台湾、その他東南アジアでの中国語彙を“南のことば”と呼ぶことにする。

このように、同じ中国語でありながら、われわれにさ

えその違いが歴然と分別ができるのは、経済特区の出現とその発展によるところが多い。以下、深圳地区に渦巻く“南北”ことばの相異を、香港大公報や香港での共通語教育に関する教材等から少し拾ってみよう。

北（共通語） 南（香港その他） 意味

艾滋病 後天免疫不全症 エイズ

波音客機 珍宝客機 ボーイング機

彩色黑白電視機 電視機（カラー） テレビ

出租汽車 的士 タクシー

東三省 東九省 東北地方

反面	覆面	否定的なことは
廣播体操	韻律操	ラジオ体操
接班人	接班人	後継者
敬老院	安老院	養老院
検討	回顧	反省する
空調機	冷暖風機	エアコーン
拡大	恢宏	拡大する
联系	聯絡	連絡する
人民群衆	民衆	大衆
手表	腕表	腕時計
事故	意外(的士)々	事故
希望	冀望	希望、望む
洗澡	冲涼	入浴、シャワー
幼稚園	幼稚園	幼稚園
野心	中性、雄心	野心
圓珠筆	原子筆	ボールペン

なお、ファンとかマニアなどということは、共通語では「迷||ミー」といい、例えば、「上海球迷協会||上海サッカー・ファン協会」の成立を報じた香港大公報は、

これを「幾百名足球發燒友組成||数百人のサッカー・ファンが組織した」と表現している。

また同じことばでも、南と北では意味内容が全く違ってくるという場合がある。

「還可以||ハイ、コーイー」ということば。共通語では「まあまあです」と訳せる、どちらかといえば、物事を肯定するニュアンスを持っているが、香港や台湾では、それとは逆に「満足とまでいかない」否定的なニュアンスを持つようだ。

「搞||カオ」、これは解放後全国的に普及したことばで「做||ををする」「幹||ををする」「辦||ををする」と同じように、行為動詞の前におき、その行為を表わす。例えば「搞研究||研究をする」「搞工作||仕事をする」「搞联系||連絡をつける」等であり、「搞什么」といえば、共通語では「何をしていますか」と普通の問いかけになるが、香港や台湾では、人を疑ってかかるけなしことばである。

仲買人の活躍も必要

早いもので、中国が政治改革と経済開放の政策を取り始めてから、もうひと昔になる。大陸では漸くその軌道に乗ってきたようであり、近来いろいろ新しい事象が

現われ、大衆に目を見張らせている、とのことであるが一体何がどのように起っているのでしょうか。

そんな目で中国の新聞を見ていると、これまで資本主義の遺物として無視され、破壊されていたものが、今や息を吹きかえし、どんどん成長している姿が、目にとまる。中でも「昔とつた杵柄」とばかり、高齢者のブローカーまでが、腕に「より」をかけて活躍している姿である。

その筆頭が質屋である。個人経営から合資経営まで、また質草に対する融資も五〇〜八〇%、毎月の手数料も〇・六〜一%、入質期間は三〜六ヵ月、質流れ品は貴金屬の場合、国家へ納める以外、その他の物品はすべて店主が競売処分することができる。

例えば牡丹江では、個人で開業した四十三才の男性、開業三日にして、一千元（一元〃約三五円として三万五千円相当）の質草を扱った。彼の投資額は八万元（約二八万円相当）で、敷地一三〇平米に事務所と倉庫を建て、従業員二人を雇っている。

湖南省邵陽市では四人の合資で開業、一ヵ月で三百余件、一万三千元（四五万五千円）の質草が集まり、日用品、家電用品から不動産の保有証明書まで扱っている。

以上が中国紙からのデーターであるが、もつと「大繁

盛」なのは「日経」記者の報じる五月二六日上海電。

浙江省温州市では五軒の質屋が開業している。そのうち鹿城典当商行（典当は質屋の意味、商行は商店の意味）では、開業一ヵ月余りで二百二十七万元（約七千九百四十五万円）相当の質草を扱った、としている。因にこの質屋は株式制で、登録資本は「三十万元（約一千五〇万円）」であり①暴利を目的としない②顧客は企業に対する融資が九七%で生活困窮者はほとんど対象外であるといっている。

驚いたのは「ブローカー」の活躍である。解放前には「牙行」ヤーハン」といわれていたが、一九五三年には



「千のチャイナタウン」(リプロポート)
広東の薬屋街 (本文より)

完全に消滅した。だが商品経済の流通面では、その「手引き」であり「使者」である仲介業者が必要になる。

三十数年間眠っていたこれらのブローカーがあちこちで活動し始めた。瀋陽市には現在その登録者が千三百人に達しており、商品の註問や加工を請負い、滞貨の処理や原材料（石炭）との交換、資金余剰と不足の調整、経済情報の提供、技術相談や住宅の斡旋から就職案内まで手広く活動している。またその行動範囲も全国的であり、南は広州や深圳、西は新疆、内蒙古、北はハルビン、長春へと足を伸ばし、瀋陽で買い集めた鋼材、石炭、自動車、毛糸、砂糖、電気製品等を上述の各都市へ拡散し、現地の土産品も取扱っている。

広州市には「交易服務公司」の中に「仲買人サービスステーション」が開設され、わずかに十数日間に一五六人が政府公認の仲買人として登録を終えたが、その中に八十歳を越えた老人組が二〇%と、意欲の旺盛さをみせている。

福州市では企業、個人商店および住民ら一人一人が合資で「銭荘」チエンジュアン」という「相互銀行」を設立したが、この一年間に貯金、貸款が五千万元（約一六億五千万円）に達している。これには、金融機関を退職したものが中心となって活動している。

経済特別区の第一号としてデビューした深圳市では、中国で初めての民間弁護士が、三人開業した。その一人の段某は八三年人民大学法律学科を卒業した人である。

さらに変った商賣に「保鏢」バオビアオ」という中国特有の用心棒が息を吹きかえしている。南京市には「南京保安公司」が開設された。この従業員は赤地に白抜きの「保安」と書いた腕章をつけており、商用で動く旅行者の荷物を安全に護送するのが役目である。

また「智囊公司」人材銀行」が広州市に生れた。これは主として政府や企業からの求めに応じ、案件の策定や諮問に人材を派遣する会社。その対象範囲は広く、国内経済、対外貿易から新技術、新製品の開発等にも関係している。スタッフは大学や科学研究部門別に教授や高級技師約四百名から組織されている。需要側の求めに応じて、適切な人材が送られ、教授側からいえば「八時間」以外に才幹を伸す場が与えられていることになる、と評判がよい。（人民日報・海外版、八八・五・一八より）

役人の賢さと大衆の歯軋

卓球用語に「エッジボール」というのがある。これはピンポン球の縁をかするようにして打ちこむ打法なので中国語では、これを「擦辺球」ツァ・ピエン・チウ」と



「千のチャイナタウン」(リプロポート)
上海の露店 (本文より)

いつている。

野球用語で「擦棒球」ツァ・パンチウ」といえば、フ
ァールチップのことで、これは有効打とはならない。
だが卓球での「擦辺球」は、なかなかの効果を発揮する
のだ。これをうまく打ちこなせば、球の回転速度が急に
加速したり、減速したり、打ちこんだ後の球のパウンド
にも変化が起ころるなど、相手に打ちかえて来るタイミ
ングを狂わせるのである。

役人にまつまる道義的汚職は、いつの世、どんな社会
にもなくならない。中国でも行政改革が叫ばれて久しく
なるが、この「擦辺球」をうまく使いこなす役人にかか

ると、打ちかえてやる術すべもない。そんなもどかしさに
咬かんでいる齒はきりの音を「自由談」(人民日報・海外版、
八八年五月二六日)から聞いてみよう。

Aの場合：Aは料理屋に上り、公費で山海の珍味を
たらふく。大いに飲み、大いに食った揚句、ポケット
から小銭こせんを出し「意思意思いしリース・リース、気持ち
だよ」とか何とかいって、料理屋の会計に、そっと握
らせる。——これで「タダ食い」という汚職うしから免れ
るのである。Aは「お金を支払う」という球の縁うしを
一寸うしこすっただけで、堂々と公費でタダ食いをしてす
ましておれるのである。

Bの場合：Bはある名所を観光したくになると、必ず
公費出張を計画する。資材購入とか、何々視察とか適
当な名目をつけて、私の目的を達成する。——これは
「公費出張」という球を、その縁うしだけ一寸撫でている
のだが、外見は公費出張で通せるのである。

Cの場合：人事問題などで票決が必要となる時など、
Cは意中の人物を勝たせたいために、鼻先で合図をし
たり、目くばせをして、みんながその人物に挙手する
よう暗示をかける。——「民主」という大義名分の縁
を一寸撫でただけで、民主選挙が実現したのである。

卓球の「エッジボール」ではないが、このように一寸
小手先をきかすだけで、名目が立ち、正々堂々、どこに
出ても平気の平左である。でなければAは「公費遊興」、
Bは「公費観光」、Cは「権力乱用」のそしりから免れ
ない。だが、役人や政治家さんは嚴重な規則も軟化させ、
大義名分の「原則」までもうまく、いやずる賢く活用す
る術を心得ているのである。

(しばた　みのもる・文学部非常勤講師)

— 寄稿 —

網野善彦氏著 『異形の王権』

について

石尾 芳久



本書の一六〇頁から一六一頁にかけて、後醍醐の政治として、佐藤進一氏の『日本の中世国家』から引用されて、『官司請負制のオール否定』、官位相当制と家格の序列の破壊、『職の体系』の全面的な否定であり、古代以来の議政官会議―太政官の公卿の合議体を解体し、『個別執行機関の総体を天皇の直接掌裡に入れること』を『最も基本的な改革目標』としていた。この驚くべき専制的な体制のモデルは、宋朝の君主独裁政治ではなかったか、と佐藤は推測しているが、ごくごく短期間で崩壊し去ったとはいえ、ここで後醍醐の実現しようとした体制が、天皇史上、全く例のない異様な政治体制であつ

たことを、佐藤は明確に実証したのである。」とのべられている。

中国の宋朝の官制の継受の問題は、後醍醐の宋学への関心とあわせて考えられるところである。要するに、太政官制というものを解体したということと、個別行政機関を天皇の直接統轄下においたということであるから、これは、確かに日本の天皇制において、原始古代以来、たとえば、二王制、あるいは、実質的な基礎をなしている畿内貴族の合議制、名代・子代の問題、二王制を天皇と皇太子の共同統治として把握した問題、さらには天皇と太政大臣との共同統治、太政大臣というものが天皇と

同等の権限をもつところから、太政官会議を、単なる諮問機関ではなくして議決機関として形成しうる起動力になったということ、さらには摂政・関白の問題、というように、太政官制というものと古代天皇制との必然的關係の本質は、天皇独裁を決定的に否定する国家体制であったところにある。この体制を、後醍醐は根本的に否定したのである。さきほどのべたように、個別行政機関というものを天皇の統裁下においたということとは、いうまでもなく専制君主制としての天皇制が、ここから始まるということを意味する。後醍醐は専制君主としての天皇制の創始者である、と考えて差し支えない。ただ、この制度は、宋王朝の官制の模倣であり、宋王朝の依拠した、伝統的秩序—律令法への模倣である、という点を見逃すべきではない。

次に、本書の一六一頁で、網野氏はさらにこの問題を追求して、「目的のためには手段を選ばず、観念的、独裁的、謀略的で、しかも不撓不屈。まさしくヒットラーの如き人物像がここに浮かび上がってくるが、このような異常な性格の天皇を時代の表面に押し出した十四世紀の日本列島の社会の激動する状況を、その深部から明らかにすることなしに、またその中で後醍醐を突き動かした、前近代において恐らくは最も深刻な天皇の地位の危



「異形の王権」網野善彦(平凡社)
法服を着、密教法具を手にした後醍醐像
(本文さし絵)

機の実情を説明することなしに、さきの諸問題を解決することのできないことは明白といってよい。」とのべている。

「ヒットラーの如き人物像」という網野氏の指摘は、こういう指摘が、藤沢の清浄光寺に伝えられていた後醍醐の密教の法服姿の画像—このように後醍醐の像の特色を指摘したことは百瀬今朝雄氏や網野氏のすぐれた発見であるが—といかに調和するか、という問題がある。その画像の象徴する性格と専制君主制—「ヒットラーの如き人物像」がいかに相関連し理論的に調和するかという問題について、遺憾ながら、網野氏は一切答えていない。

ここに『異形の王権』の本質的問題がある。

この点については、宗教学、あるいは神話学の検討が必要であるが、それについて、マックス・ウェーバーの宗教社会学の研究を参考にしたいと思う。

密教の法服姿というのは、いうまでもなく、自らを神、あるいは仏とすることであつて、ウェーバーのいわゆる、自己神化たる呪術師の誕生というものを意味する。すなわち、呪術師というものには本来自己を神化する性格があるが、そういう性格、呪術的信仰の体现者としての呪術師が、後醍醐において、初めて誕生した。これが、古代以来継続していたカリスマ的王制の問題、あるいは、封建王制の問題とまったく違う点であろうと思う。封建王制から呪術師としての専制君主制への変化が何を意味するかということである。事柄を直截に理解するために、ウェーバーの『宗教学』二二六頁に救済宗教について「アジアの救済的宗教性と西洋の救済的宗教性との差異」というテーマに関する研究が収められているので、これを分析しながら、検討を進めていきたい。

まず、ウェーバーは次のようにのべる。

「救済方法論にとつては、少なくとも言葉の本来の意味での自己神化や純神秘主義的な神所有へと向かう道は、瀆神的な被造物神化であるとして閉めだされてしまい、

同様に究極的な汎神論的帰結にいたる道も閉鎖されてしまつて、それらは常に異端視されることとなつた。すべての救済は、かの神のまえでの倫理的「義認（レヒトフェルティグング）」という性格をたえず新たにとらねばならず、しかもこの義認は、最終的にはなんらかの積極的な行為によつてのみ成就され保証されるべきものであつた。」（武藤一雄・藪田宗人・藪田担訳）

ここで、問題となるのは、西洋の救済宗教ないしは救済方法論の本質は神の前での、倫理的「義認」であるということ、しかもこの義認というものが、実践的行動の性格をもつということである。そういう意味では、神との関係というには緊張関係が存在するというようにみなければならぬ。それに対して、自己神化という呪術的信仰、これは、純神秘の神所有—神を所有すること、あるいは神を強制することには、神との関係に緊張関係は存在せず、したがつて救済の倫理的、実践的性格は生じない。

すなわち、呪術的救済信仰は、神への信仰ではなくして、神を強制するという擬似的信仰である。それが、呪術の本質である。この自己神化ということは、救済的方法論をとり得るといつても自己のみの救済を考えているにすぎない。一般の貧しい人々、恵まれない人々、病め



「異形の王権」網野善彦(平凡社)
後醍醐の手印(本文さし絵より)

る人々、といった民衆を救済するという思想がまったくない。そういう意味では本来の救済宗教とは鋭く対立する性格がアジアの救済宗教にはあったということ、またはあり得るということである。あるいは呪術的信仰はそういうものであるということである。であるから呪術的信仰というものの、これが、西洋の真の意味の救済信仰においては瀆神的な被造物神化であるといわれているのも理由があるのであって、これはむしろ、本来の救済信仰と鋭く対立するものであり、その救済は欺瞞的救済あるいは、幻想的救済を民衆に与えるにすぎない。そういう意味の欺瞞的救済宗教であり、幻想的救済宗教にすぎない、ということを考えておく必要がある。神所有―神々を強制する立場をとろうとすること、これが自己神化を押し進めたことの結末である。このような呪術的信仰というものは必ず、神々を強制するという力をもつ伝統的秩序、あるいは永遠の過去の秩序と理論的に適合的であるといわざるをえない。

次に、ウエーバーの『宗教社会学』の二〇二頁にさきほどのべた、東洋の救済宗教、あるいは一般に呪術的な救済信仰にとつて、その場合の救済にとつて、自己神化の系譜において考察されるべきものがある、とする。ウエーバーの叙述を読んでも次のようにある。

「救済」または「自己神化」の手段としての忘我（エクスターゼ）には——ここではそのような手段としてのみこれを問題にするのであるが、——脱我や憑依といった急発的性情をより強くもつ場合と、昂揚した特殊な宗教的態度（ハービトウス）の持続という慢性的性情をより強くもつ場合がありうる。」

要するに、この場合の救済というのは、「自己神化」であり、「忘我（エクスターゼ）」という意味の救済にすぎない。さきほどのべたように、自己自身の幻想的救済のみを考えているというのはこの意味である。他者の苦しみ・不幸に対する完全なる無関心・傍観がある。この「忘我（エクスターゼ）」の手段として「有毒物（アルコールや、あるいはタバコその他の毒物から取り出されたもの）や音楽舞踊や性的興奮のいずれか（あるいはこれら三種類のもの併用）による急激な陶酔の招来」があるとのべ、これが「狂躁（Orge）」であるとす。

ここで、特に「性的興奮」を問題にしている。あるいはまた「狂躁（Orge）」ということの問題としている。しかもまた、「性的興奮」なり性愛というものが、その起源がほとんどインドにある。これはインドのヒンズー教というものがもっている、カースト秩序の思想、あるいは、輪廻思想というものが、すくなくともその推進力と

いうものがこういう呪術的信仰であると考えられているわけであって、まさにその呪術的な信仰というものが、真実の救済宗教を逆立ちさせたものだということのように考えなければならぬであろう。

網野氏は、「異形の王権」一八〇頁において、「後醍醐自身の行動の中で、もう一つ、天皇史上、例を見ない異様さは、現職の天皇でありながら、自ら法服を着けて、真言密教の祈禱を行った点にある。」とのべている。

この点は網野氏や百瀬今朝雄氏のすぐれた指摘である。「異形の王権」一八二頁には「後醍醐は自ら護摩を焚いて、幕府調伏の法を行うという異例中の異例を行うことによつて、その姿勢を世に示したのであり、まさしく百瀬のいう通り、伝聞とはいえその情報に接した金沢貞頭をはじめとする幕府の要人たちは、『護摩の煙の朦朧たる中、揺らめく焰を浴びて、不動の如く、悪魔の如く、幕府調伏を懇祈する天皇の姿を思い描いて、身の毛をよだたせた』に相違いない。」とのべている。

あるいはまた同書一八二―四頁に、これは文観の影響によるとしながら、この時宗の寺院の本尊に「聖天供の本尊大聖歓喜天は、ふつう象頭人身の男女抱合、和合の像であり、男天は魔王、女天は十一面観音の化身といわれる。」とのべ、さらには、「天子自ら金輪の法を行はせ

給う」という『太平記』の叙述を指摘している。

網野氏自身はさらに同書一八四頁において、「極言すれば、後醍醐は、ここで人間の深奥の自然―セックスそのものの力を、自らの王権の力としようとしていた、ということもできるのではなからうか。たしかに後醍醐は『異類異形』の人々の中心たるにふさわしい天皇であったといえよう。」とのべている。

網野氏自身が、なぜ、「セックスそのものの力を、自らの王権の力」と解したのか、その理由は何かということについての説明はない。こういう問題はこのような叙述で解決できるかということにきわめて疑問があるのであり、セックスの力というのは、さきほどのべたマックス・ウェーバーの自己神化の本質の意味をもつ、「忘我（エクスターゼ）」に達するセックスにすぎない。あるいは、「狂躁（オルギー）」を誘発するエクスターゼに達する手続きにすぎないというように考えるべきである。そうであれば、この瞬間的忘我（エクスターゼ）において、権力の主体たる責任の重さを回避し忘却しようとした、アジア的専制君主たる、後醍醐の考え方をみることであるであろう。

ここに呪術的信仰と専制君主制がなぜ、理論的に適合的關係をもつかということ、専制君主制というものはカ



「異形の王権」網野善彦(平凡社)
後醍醐自筆の繪旨(本文さし絵より)

リスマ的王制（伝統突破の原始王制）とはもつとも異なり、実は伝統的秩序に深く依存している君主制であるということを理解し得るであろう。自らが権力の主体である自信と責任はまったくない。むしろ、そのような自信と責任を有し得ない君主が、しかも、権力の主体たろうとするのである。それはあたかも、ルサンチマン（他者人間への極限的憎悪と嫉妬心）から権力へという（人間憎悪の精神にもとづき虚栄心にもとづいて権力の主体たろうとする君主制―専制君主制）展開の過程を示唆するものがある。

アジア的専制主義支配というのは外部的であるという

短評募集 !!



ことを網野氏は吉本氏との対談でいっているが、じつは、アジア的専制主義支配こそ人間のもっとも内面に内在するルサンチマンと深く関連し、それを刺戟しながら権力への意志を抱こうとするものであると考える。このようなるルサンチマンの持主、あるいはルサンチマンから権力意志へ上昇しようとするが故に、自己神化という方向—呪術的信仰という方向をあゆまざるを得ない。呪術師というものの自己神化とルサンチマンの間には深い関係があると考えるべきである。

神化に固執する。そのような状態にいたることを祈禱する。そこに呪術的信仰があり、神々を強要してもそのような心理的狀況を獲得しようとする。そこに、この問題を解く鍵があるというように考えるべきである。

「異形の王権」一八六頁に網野氏は「非人の軍事力としての動員」ということをのべているが、これは自己神化たる呪術的信仰の「狂躁 (Mania)」の性格が非人を集合せしめ軍事力として動員することを可能にする。ともすればルサンチマンの状況に陥りやすいという非人層と実は一体的な共感が後醍醐にあつたのではないかというようにみるべきであり、そのようなかつてないルサンチマ

短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれはぜひ人にも勧めたい、あるいは、強く印象づけられた本の短評を

原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

☆ジャンルは自由、締切は毎月末。

●あて先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合「書評」編集委員会

☎387-19998 (直通)

☎388-11121 (内線4821)

ンの持主である、天皇、そういう意味の専制君主たる天皇の出現を意味するという点において、すなわちここで、初めて真の意味の呪術師たる専制君主が誕生したという意味において、後醍醐は天皇史上、異例の人物であるという理由があるのである。

次に同書一六二頁において、後醍醐の側近、伊賀兼光について網野氏はのべている。この中にも重要な指摘があるが、一六八頁のところに、この兼光を後醍醐に結びつけたのは文観であったとある。そして、文観という僧は、西大寺系の律僧であったということは網野氏のいうごとく、すでに立証されている。しかも、この文観は「観尊のおこした文殊信仰の熱烈な法弟」として、観尊の十三回忌の追善にととめる西大寺の律僧として、その姿を現しているのである。」とのべている。

同書一七二頁には「嘉暦三年（一二三二）の後醍醐による忍性への菩薩号授与の背後にも、恐らく文観の手が動いていたと思われる。」とのべられている。しかも、一七三頁には、この文観が「茶吉尼」を祭るとある。「茶吉尼」というのは一七五頁に、「タントリズムの性的ヨーガのさいの女神で、狐の精ともいわれる」ものであると指摘されており、そういうものを祭ったのである。

同書一七三頁には「律僧でありながら『破戒無慚』、

武勇を好み、兵具を好む。まさしくこれは天魔鬼神の所行であり、『異類』そのものにほかならぬ。」とのべる。

ここで、注意しなければならないのは、観尊、忍性については、私がすでに立証したように、仏の下の平和運動、西洋流にいえば、神の下の平和運動というものを通じて、非人層が非暴力主義、あるいは行刑役を拒否するという徹底した非暴力主義の運動を推進し、自らの商手工業を通じて、中世の宗教的自治都市の市民たる身分を獲得するという運動を指導した僧であり、非人の指導者であった僧であるということである。そこに、中世非人に対する、観尊、忍性の真実の救済信仰の性格（それは西洋の救済信仰とその本質を同じくし、その任務は原始真宗教団の自治都市建設の運動にひきつがれていくのである）、非人から市民へという解放的性格がある。

それに対して、文観は非人の軍事力として利用しようとした。いわば、暴力として利用しようとしたところが重要である。このことは文観が観尊、忍性の弟子である、特に観尊の「熱烈な法弟」であるとしても、真実の意味の救済信仰をまったく逆立ちさせたものであり、日本の救済宗教の運動を逆立ちの方向に逆転せしめた、そういう運動の張本であるといつてさしつかえない。

ここに、茶吉尼を祭った一セックスの力（エクスター



「異形の王権」網野善彦(平凡社)
大聖歡喜像
苴油をかけて修する聖天浴油供の像
(本文さし絵より)

ぜとオルギー)に依存しようとした、真の救済宗教とま
ったく本質を異にする「後年、立川流中興の祖といわれ」
(一七五頁)るような大逆転の過程がある。その過程と
いうものと後醍醐の専制君主制への逆行の方向とが相対
応するということ、しかも、旧中国専制君主制を模倣す
る専制君主制への方向に進もうとした後醍醐は徹底した
自信のなさ、ルサンチマンというものをバネとして権
力意志に跳躍するために性的興奮と狂躁の呪術信仰に依
拠したのである。それが後醍醐の自己神化と呪術師たる
信仰の本質にはかならない。それと共に、後醍醐の側近
が呪術的信仰の徒の集団からなっていたという事実を我

々はけつして忘れるべきではなからう。

これに反し、真の意味の救済宗教の本質が、神の下の
平和運動とともに進められるということ、そういう意味
の解放運動であり、宗教思想運動であったということは、
すでに、マックス・ウェーバーが指摘している。「宗教
社会学」一五七頁のところにごとくのとべている。

「ある民族の社会的特権階層が救済宗教性を最も持統
的に発展させるのは、普通、その階層が非軍事化されて、
政治活動の可能性またはそれへの関心から離れていると
きである。それゆえ救済宗教性が典型的な仕方で見れる
のは次のような場合である。すなわち、貴族にせよ市民
にせよ支配権を握っている階層が、官僚的—軍事的な統
一国家権力を通じて非政治化された場合、もしくはなん
らかの理由でそれ自身が政治から遠のいた場合、いいか
えればこの階層の知的教養の発達が思想的および心理学
的に最もつきつめられた内的帰結にまで到達し、彼らに
とってそれが外的な此岸の世界での実践活動以上に重要
な意味をもつにいたったという場合である。……知識人
階級の非軍事化が行われ始めるときなのである。」

ウェーバーの叙述には多少の矛盾もあるが、概括的に
いうならば、救済宗教というものは、非軍事化—非暴力
という神の下の平和運動を通じて進められる。そしてそ

これにおいてこそ宗教的自治都市の市民階級が形成される。権力と自治活動、経済活動との間に一定の距離を可能にするようなそういう権力の合理化を促進する原動力となるのである。

これに對して、中国の儒教は「權勢にあふれる官僚階級の倫理として、いかなる救済宗教性をも拒否する。」とのべているが、インドのヒンズー教の場合には欺瞞的な幻想的な救済宗教性をもつて、眞実の救済宗教に換えたということ、あるいはわが国の後醍醐ないしは、それを取りまく人々の呪術信仰というものは、救済信仰というものをまったく逆立ちせしめるといった性格をもつものだとしように考えるべきである。

かくして、網野氏のいった次の箇所が、決定的難点となる。『異形の王權』一九八頁に次のようにのべる。

「『こうした』聖なるもの——天皇・神仏の權威の低落は、それに結びつき、その『奴婢』となることを通して、自ら平民と區別された『聖』なる集団としての特權を保持していた供御人、神人、寄人などの立場に、甚大な影響を与えたことはいうまでもない。後醍醐が実行しようとして、大寺社の反発で結局は貫徹しえなかつたとみられる落中酒鑪役—酒屋役、さらに土倉役の賦課を足利義満が断行したとき、山門等の寺社がなんらの動きもみせえ

なかつたところに、この変化が端的に現れているといつてよい。もちろん供御人、神人、寄人の称号がすぐになつたのではなく、商工民、芸能民は室町以降もなおそうした立場に多少とも依存しつづけてはいるが、もはやそのみに依存して自らの『芸能』を営んでいるだけでは到底すまなくなつてきたのである。」

『聖』なる天皇の權威の強い時代にはそれと結びついていた、あるいは「その『奴婢』となることを通して、自ら平民と區別された『聖』なる集団としての特權を保持していた供御人、神人、寄人など」は、まだ卑賤視されていなかつたのであるが、「『聖なるもの』——天皇・神仏の權威」が低落するにしたがつて、これらの「供御人、神人、寄人など」の中世非人に対する決定的な卑賤視が始まつたのである。

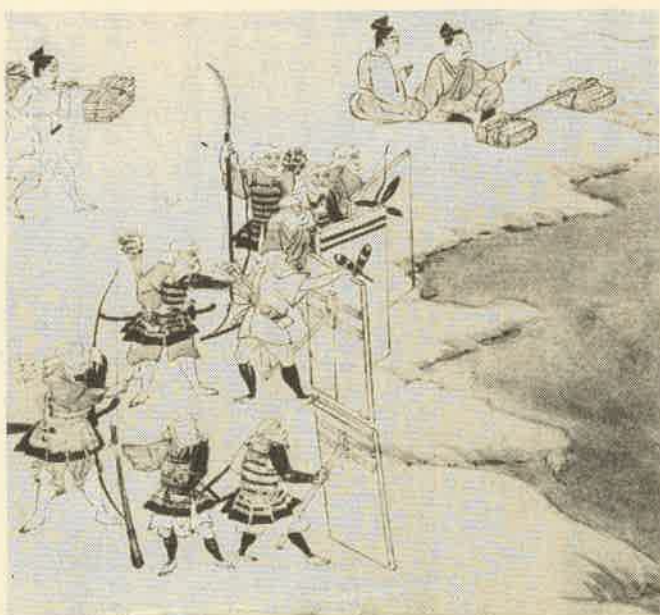
これによれば、神聖なる天皇制の權威の低落が、中世非人の卑賤視、卑賤視を決定したということになる。このことはいかなる意味であろうか。「聖」なる天皇の權威の上昇とともに、非人の身分は上昇し、「聖」なる天皇の權威の低落とともに非人の身分は低落するという理論を示されたものと解せざるを得ない。

それでは「聖」なる天皇制の權威なり、権力というものの高揚と低落に應じて賤民身分の上昇と貶下が決定す

ということになるが、『河原巻物』をみても明白であるように、天皇制イデオロギーの高揚は網野氏の理論とは反対に、賤民身分への身分貶下を決定的とするが、この問題を網野氏は如何に解するか。天皇の権威に依存するということが、はたして、中世非人の解放につながるかどうか。

中世非人は自らが都市の市民になるという自らを解放する運動によって市民たる資格を取得するということを私は立証したことがある。天皇の権威につながるということがいかにして解放の推進力になるかという問題である。そうであれば、明治天皇制における、天皇の神聖不可侵の権威の上昇というものによって、すくなくとも、現在見られるがごとき被差別部落の存在は解消されたはずである。このことを網野氏はいかに考えられるであろうか。

ここに網野氏の理論の決定的な矛盾が現れている。すなわち、網野氏はたとえば、近世天皇制における実質的権力を失っても、たんなるイデオロギーに転化した天皇制思想の中に実はヒンズー教にも通ずるような輪廻思想、あるいは、確固たるカースト思想が含まれる可能性があるかあるということを看過されている。それほど、牢固たる天皇制イデオロギーというものを作り上げているのが近世天皇制の特色なのである。その出発点は、むしろ、室町



「異形の王権」網野善彦(平凡社)
「遊行上人縁起絵」(金光寺本)巻五より、武装する非人の集団(本文さし絵)

後期なり、戦国期に求めるべきであるが、そのように考えれば天皇制イデオロギーが当然に果たした差別的役割というものを矛盾なく理解することができるだろう。

網野氏のこの誤解の究極的な決定点は、救済宗教に対するまったくの誤解に由来する。つまり、真実の救済宗教と欺瞞的な救済宗教、幻想的な救済宗教というものの相違すなわち、呪術信仰たる欺瞞的救済宗教への大逆転の時期こそ、まさに後醍醐の時期であるということ、そして、真実の救済宗教と、欺瞞的幻想的救済宗教という二つの思想の重大な相違を見過ぎたという点にある。いずれも天皇の神聖な權威を補強するものとして単純に考えたという点に問題がある。

であるから、「聖なるもの」―「天皇」というのは一面では救済宗教上の救済者たる役割をも演ずるという（中世非人が天皇に依存して身分解放を行うという）奇妙な結論にいたるのである。これらは真実の救済信仰―救済宗教というものと欺瞞的な救済宗教というものととの区別、思想上の区別というものを見過ぎたという点によると考えられる。網野氏のいうごとく天皇制の神聖化ということが、被差別身分の解放につながるとは歴史的にも理論的にも断じて立証されないからである。

次に、網野氏は同書一九八頁において、「有徳」なる

商工人をもつて編成された自治的な都市というものの自治が進むにしたがって、「一部の芸能民、海民、さらには非人、河原者などの場合、職能自体の『穢』との関わりなども加わって、ここに決定的な社会的賤視の下に置かれることとなった。」ということをつけ加えている。

自治の誤解と共にたんなる無信仰がただちに合理的な思考につながるといふように考える誤りを犯したものであって、たんなる無信仰というものはむしろ容易に呪術的な信仰に転落しやすいという面を忘却している。

真実の意味で合理的な方向を示唆する、志向するそういう商工民の身分層あるいは階級が確立していれば、それに対抗するものは労働者階級であって、ここには階級対立は必然的におこるはずであるし、そのような階級対立は卑賤観・「穢」観というものをただちに克服できるという力をもっているはずである。そのような階級闘争は一向衆徒以外にはおこなわれなかったということ、あるいはキリスト教徒以外にはおこなわれなかったことにまさに日本の近世の問題があるのである。

これらを要するに、網野氏は後醍醐の密教的画像を発見したその意味を深く追求するというすぐれた研究をしながら、それと後醍醐の専制君主性格との関係を理論的にも実証的にもつきつめて考えようとしなかったと

いうところから、したがって、後醍醐の側近である、たとえば、文観のもっているところの叡尊の救済宗教というものを逆立ちせしめた、欺瞞的な呪術的な救済へと逆立ちせしめた問題を看過したというところから、次第に天皇制に依存する身分解放が可能であるという誤れる見解におちこんだのである。呪術師たる専制君主というものの性格に深く切りこむべきであった。そこに深く切りこんでおけば、天皇の神聖が高まるに依じて、中世非人の身分が上昇し、天皇の神聖化の低落に依じて、中世非人の卑賤観が始まるといった、むしろ、天皇制に癒着することが非人を解放するとか、あるいは被差別者を解放



「異形の王権」 網野善彦(平凡社)
茶吉尼天曼羅(大阪市立美術館蔵)

するということになるというのがごとき結論を出すことはなかつたであろう。

網野氏はセックスの力というのが、天皇制の専制君主制の性格の中に内在することをもって野性の世界の復活(「野性的な反発」)―「後醍醐はそうした反発力を王権の強化のために最大限に利用し、社会と人間の奥底にひそむ力を表にひき出すことによってその立場を保とうとしたのである。」(同書一八六頁)とみなしているが、これもまた問題であって、セックスの力がいかにして君主権力というものを充実せしめるのか、その理由は「奥底にひそむ力」という表現以外一切のべていない。セッ

クスの力ということは擬似的な救済信仰の呪術師たるエクスターゼの手續きにすぎない、一時的な忘我状態によって自己のみを解放したというように考える、そういう過信あるいは幻想にすぎないということを見過ごしている。それはたんなる呪術師の「忘我」であり、「狂躁 Orge」であるにすぎない。

その「狂躁 Orge」がいかなる意味で革命運動につながるのかということは一切明らかにしていない。革命運動はセックスの力で可能になる、男女の抱合によって可能になるといふような安易なものではない。

ここにも重大な問題がある。要するに、極めて鋭い問題指摘なり、叙述にもかかわらず、思想史というものに対する切り込みが足りない。たんなる芸能史というものをもって、ある意味において思想的な問題をも窺うるとしたその方法論の誤りによると考えるべきである。わが国において被差別部落に伝えられた『河原巻物』において、何故、皇室伝承が多いのか、垂仁天皇とのつながりをなぜ説くのか、弾左衛門由緒書の中にも頼朝のみならず天皇との癒着を示すものが多いということをかかへて解するか。この傾向は近世においてますます高まってくる。これは網野氏の理論にとって決定的に解決できない問題となるであろう。

すなわち、被差別部落に浸透したイデオロギーにおいて、天皇制神話と、あるいは神聖なる天皇制の権威がいよいよ強調されるその時期は、近世における被差別部落の身分というものが外面的にも内面的にももっとも低落し、もっとも卑賤視された時期であるという事実である。

すなわち、イデオロギーにおける天皇制の強調と天皇制の神聖化、天皇伝説の強調（その根本に幕藩体制のアジア的専制主義支配がある）と、被差別部落に対する徹底的な卑賤化（身分差別の序列の中の最底辺に位置づけられる）というものが、確固たる関連をもって語られているということが、『河原巻物』の提起する重大な問題である。この関連を断ち切ることによってしか、被差別者は自らを解放することはできない。そしてここにこそ自らを解放するという解放運動の本質がある。このように考えるべきである。『河原巻物』の存在によって網野理論は決定的に破綻するというようにいわざるをえない。

（いしお よしひさ・法学部教授）

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

投稿してみようと思う方、投稿の内容は、最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

問い合わせ先 Ⅷ(〇六) 三八七一九九九八

(〇六) 三八八一―一二一

(内線 四八二二)

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行(二五〇字)を一枚と計算します。

▼枚数は自由。(ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。)

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東三一〇―一

関西大学生生活協同組合「書評」編集委員会

Ⅷ(〇六) 三八七一九九九八 直通

三八八一―一二一 内線 四八二二



画文集「安野光雄の「フェアブル紀行」」(日本放送出版協会)より

編集後記

入道雲がうろこ雲にうつり変わり、風の冷たさが秋を知らせてくれる。秋もまた読書をはじめ考えごとをするには最良の季節だ。今の季節、一冊手に取って読んでみようか、という人も一度は以前に岩波新書を読まれたことだろう。今回の特集は、今年、秋をもって50周年をむかえる岩波新書を取り上げてみた。岩波新書への評価は様々であろう。岩波新書は敗戦後の一連の諸問題を取り上げ続けたことは評価されている。しかし今回の編集子の岩波新書への視点は当初そのプラスの評価面のみ向けられており、他出版物との比較や岩波新書自体の批判には向けられていなかった。それは序文で述べられる通りである。執筆者への依頼の段階に至り、編集子の岩波新書への批判点の不明確な点があり編集企画の不十分点のために執筆者への編集意図の共有が難しかったと思われる。だが執筆者の「戦後」についてのそれぞれの体験と考えや見方などからも、これから「戦後」の内容と、それがいかに名ばかりの「民主主義」であるのかを知ろう。そして今の私たちの歴史を真の平和なものとしてゆくための考え、行動する視点の構築のために学んでゆきたい。

季刊『書評』 1988年10月号 通巻85号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1(☎388-1121(内線4821)or 387-9998)
頒 価 250円